# 土浦

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可　昭和十一年四月廿日印刷納本　昭和十一年五月一日發行　第二卷　第五號

五月號

佐藤春夫著・小杉放菴挿繪並裝幀

# 法然上人別傳 掬水譚（きくすゐものがたり）

△限定出版 壹千部

△定價 四圓五十錢・送料廿二錢

△七八寸特製ノート型・天金・十二ポ總振假名・約三百頁・美麗函入

△放菴畫伯に依る……裝幀、見返し、六十四葉挿繪（玻瑠版）

△兩大家一致の想になる 豪華・絢麗版

一部を備へて家寶とせられよ

## 名篇！遂に出づ!!

**文豪佐藤先生の流麗圓滑の文と畫壇の雄小杉畫伯の枯淡風雅な挿繪になる昭和に生きた法然上人傳！**

**宗教文藝の精髓・千載に光彩を放つ。**

過般大毎東日兩紙に連載し、百萬の讀者を魅了したるもの。俗に媚びず、難に墮ちず、作者自ら淨土の信仰を摑み、一篇一篇悉く念佛の溫床に育成された宗教文學の最優なる創作。

**◎著者署名の特典**

特に記念の爲め、法然上人鑽仰會への直接註文に限り、著者署名す。

法然上人鑽仰會 發行所

# 法然上人の
# 信仰生活

中村辨康著　四六版　一三〇頁　定價送料共　三十四錢

**これぞ光明！　時代の惱みを一身に背負ひ、精魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生活の跡！**

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齋らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に惱み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に說かれてある。

讀んで得られよ！　正しい信仰を！

## 目次


**第一　求道生活**　一第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

**第二　信仰生活**　一入信時代の新生活——强い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて來るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆緣を順緣と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。**法然上人年表**



◇發行所　法然上人鑽仰會◇

◇淨土 第二卷第五號 五月號目次◇


・表紙……山は晴れ
・扉・目次カット……青柳喜兵衛

論說
時勢は移りゆく……眞野正順（二）

育てるもの・育つもの
鳥の情……中西悟堂（三）
大空に伸びる……内山憲堂（一七）
朝顔餘談……木村曾根（二一）

三來夜話
義人榊原龜三郎……大島徹水（三六）

信仰感話
貴族院の地藏尊……石橋德作（二四）

隨筆
春は西方淨土から……小島一谿（二八）
春にちなむ句……荻原國三（五八）
遊蓮坊に誘はれて……前田聽瑞（三三）

藝道談義 修業第一……中村吉右衛門……（四〇）

名將信仰 大楠公と佛教……村雨退二郎……（六〇）

◇逸話名僧傳……（三五）

◇リンカンものがたり……（二三）

信仰相談……（六六）

大衆小說 鮨屋の彌助……子母澤寛……（四二）

女人禁制 アトスの僧侶……中村一……（五四）

生活體驗 盜まなかつた財布……福井貞助……（六四）

法語講義 あふひ草……中村辨康……（七一）

歌壇……與謝野晶子選……（五五）

俳壇……（五八）

編輯後記……（七九）

# 信仰讀本

増補改訂版

中村辨康著　四六判八〇頁　総ふり假名付　定價送料共二十二錢

## 邪教の迷夢より醒めよ！信仰を正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならない。

今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強き信仰への扉を打開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

### 内容


第一章　悟りと救ひ
第二章　宗教と人間の望み
第三章　信仰する心持
第四章　信仰の本尊
第五章　信仰を得る迄

大正大學教授 大野法道著　四六判七〇頁　定價送料共拾七錢

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その婀々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込ますにはおかない。


發行所　法然上人鑽仰會

# 淨土

## 五月號

名號をきくといふとも
信ぜずばきかざるが如し
たとひ信ずといふとも
唱へずば信ぜざるが如し
たゞ常に念佛すべきなり

法然上人法語抄・八二

# 時勢は移りゆく

眞野正順

## （一）

二月二十六日早曉、帝都を飾る銀雪を亂して、突如、一部少壯將士が各所に重臣を襲撃した事件は、まだ覺めやらぬ昨夜の夢の如く、生々しい衝動を私共の胸に殘してをります。

幸ひにして、事變は間もなく鎭定し、內閣が新たに組織され、帝國はむしろ、是れを機會として、その各部面に日覺ましい一大刷新が試みられんとし、上下、心を新たにして、こゝに輝く昭和日本の建設へと躍進せんとする氣運が、到るところに滿ち渡つて參りました事は、誠に畏き御稜威の光の然らしむるところ、雄偉迫らさる皇國の步武の確かさを思はせるものがありまして、私共市民、云ひ知れぬ安らかさをわが民族の前途に感ぜしめながら、爾來、月餘を過ぎて、帝都の戒嚴令未だ解けず、春風の然しなから、

中に、今猶ほ肅殺の氣を留めてをりますのは、そゞろに事件の淵源するところ、深きを思はするものでありまして、帝國は、今や內外異常なる非常時に際會せるものなるを語つてをるのであります。誠に陸相の繰返し聲明せらるゝ如く、事は單に軍內の一事件ではない。今や帝國の全員が・肅然たる至誠を以て、互に相省み、心を合せ、身を合せて、進んで行かねば乘切ることのできぬところの急滿に、私共は際會してをるのであります。

この機會におきまして、私共は、靜かに、過ぎ來し我等が過去を顧み、その生活の仕方を檢討し、謬れるを匡し、正しきにつき、この時勢に面せる我等が「心の置きどころ」をはつきりと定めておく事が先づ何よりも大切なことでありましやう。

（二）

顧みて今、私共の現にこゝに營んでをりますこの「現代的生活」は一體何時頃から、我國の社會に現れて來たのであらうか、と考へて見ますと、それは、あの輝かしい明治維新と共に、國を開いた泰西先進の文化を努めてこの國に喚び入れたことを發端として、始まつて來たものである事は、誰しも異論のない處でありましやう。それならば、この時、潮の如く我國に亂れ入つて種々の泰西文化の中で、何が一番強く、我國民の生活の根本を搖り動かしたかと云へば、云ふ迄もなく、それは、あの驚くべき「科學」の魅力でありました。全く「科學」を持つ持たぬと云ふことの一つで、明治と其以前の我社會とは截然として區別する事が出來ましやう。其後のわが民族は、この「科學」において、どうかして先進泰西諸國に追つかうとして、實に涙ぐましい刻苦努力の年月を續けたのでありました。そして、やがてこゝに世界の驚異と呼ばれる日本民族の驚くべき急速な進歩が現はれて來た譯であります。我國が早くより、數多い有色諸人種の間に卓ん出て、唯一の一等國として覇を東洋に唱へてをりますことも、やがて實は、この科學を基本とする生活に於て、彼等に先んじ、日覺ましい躍進を遂げ得たからであるに外なりませぬ。そうして、更に今日、肩を舉げて、私共民族が、遠く先進歐米諸國に對し、今ら矜持しつゝあることも、その理由には種々ありますけれど、その主要なることは、既に、この科學に於て彼等に肉薄し、一部は既にそれを凌駕して來たからの故に外ならないではありませんか。まつたく、現代日本の中心に動

き、その生活の基調をなしてゐるものは科學です。私共が、この時代の誇りとし、現に樂しんでゐる新らしい生活の輝く内容をなすものの殆んど大部分は、悉くこの「科學」の力を根底として憑り處としておると斷言して差支ありません。

（三）

それならば、かく我民族を魅了しつくした「科學」とは一體どんなものでありましやうか。科學とは、これを大摑みに申しますと、ベーコンが云つてをりますやうに、「自然に從ふことに依て、自然を利用する」ことです。つまり、この私共をつゝんでをります一の外界自然を、よく素直に、そのまゝの姿でよく凝視め、その中に働いてゐる法則をはつきりと摑み取りまして、それを、私共人間の生活の便宜のやうに、巧に使用してゆく事であります。

そこで、科學に於て最も大切な事は、一には先づ——人間が、自分達の氣持や傳說なぞの眼鏡に依らないで、自然を在りの儘の姿に眺めてゆく、謂はゞ、成心なく、已れを空うして自然に隨つてゆくと云ふ事であります。そして二つには、かう云ふ風にして、自然の中から樣々な隱れた力を見出して、それを巧に私共の生活のために利用し、人間の慾望をより豐かに充たして行く事であります。

この事が、近世において、實にすばらしい成功を示し、前古未曾有の華麗なる文化をこの人類社會に實現しつゝある事は、今更申す迄もない事であります。我國の先覺が、この事に於て數歩晩れてゐた我國の狀態を悲しんで一心不亂の涙ぐましい努力を續けて、先進諸國に追ひつかうと努めたのも、思へば當然な事でありました。

ところが、此樣に自然外界を研究し、その中に數限りなく隱されてゐる樣々の力を熱心に引出し、それの力を傷けることなく、そのまゝ充分に働かして行くと云ふ、この「科學」は、やがて、その眼をたゞに外界ばかりでなく、また、この人間の内部にも向けて來ました。そして、人間の内部に潛んでゐる能力や慾望を、そのまゝ自由に充分に發揮してゆく事が、正しい人間の生活の道であり、從てまた人生の目的であると考へるやうになりました。

そこで、今迄の人間各個人の才能や慾望の充分な伸長を障げてゐたやうな古來の習慣や制度はどし〳〵破壞し、拭ひ去つて、何處に居ても、自由に各人がその天賦の性能を自由に發揮してゆくやうにならねばならぬ、と云ふ事にな

りまして、個人の自由な伸長に邪魔になるやうな古來の習俗はどし〳〵惜氣もなく破壞され、人間社會と云ふものはその中の各個人が、自由氣儘にその性能や慾望を伸し得るやうなものが理想的なものであるとされて來ました。明治以後、この國の各方面に於て惜氣もなく、古來の習俗が破壞され投捨られて行き、家庭なぞに就ての考へ方なぞも、非常な變り方がこの短い期間に現れて來ました事も、全くその爲でありました。

このやうに、一方、外界自然の中に潜む豐富な性能を數限りなく巧に引出し、それを、私共の生活に利用することは、他方また人間の内部に潜む樣々の性能と慾望とを果てしなく引出し、それを充分滿足せしめて行くことに、人生の興味が集注され、こゝに限りなく新らたにわき起る人間の慾望は、また、新らたな自然の利用法を要求し、新たに發見されたより巧な自然の利用法はまた新らたな慾望を人間に喚び起し、兩者互に相まつて、こゝに愈々豐麗の極を增すと共に、他方果てしなく複雜を極める所謂近代文化生活が現はれて來ることになりました。最近の時世、私共の生活の何れを取つて考へて見ましても、益々複雜を極めてゆくばかりであるのは、全くこの——果てしなき個人の慾望の解放の故に外ならぬのであります。

（四）

このやうにして、時勢は社會をいよ〳〵複雜豐麗ならしむると共に、その中に生きてゐる私共は、ひたすら、この社會の中に、自分の性能と慾望とを伸し、この科學文化の滴る果實を少しでも多く享け樂しむことが、目的となつて來ました。

然し、この社會は申す迄もなく自分一人で住んでゐるものではない。社會の多數人と共に住んでゐるのです。そこで、個人が自己の慾望を充分に滿足させやうとすると、勢い、他の人達の慾求と衝突することが出來ます。文化は社會人が共に享樂すべきものだと云ひましても、事實、社會の皆んなが悉く享樂し得るものではない。そこで、この社會に於て最も文化の利益を享樂し得るために、こゝに五の競爭が現れて來るのは、極めて自然な事でありました。

ところが、競爭になると、そこに弱肉强食の現象が現はれて來るのは、どの世界でも共通な事でしやう。そこで社會の下層には、强者の享樂の下積となり、その犧牲となつてゐながら然も切角の文化の利益も、享樂出來ず、甚だ悲

慘な生活を續けて行かねばならぬものが澤山出來て來ました。

それのみでない。社會生活と云ふものは、これを維持して行くために、常に或程度まで固定した制度組織といふものが必要です。この制度組織は、一度び獲た優者の權利をある程度までは、何時までも變らず維持してゆく傾向をもつてゐます。そこで、少しでも早くこの社會で優者となり得るものは、何時迄も、その優越な地位が社會の中に保護されて行き、一度、晩れたものは、今度は容易に頭をもたげる事が出來ないばかりでなく、却て、益々悲慘な境遇に追ひ込まれて行く。

かくて、近代の社會は、その中に各個人が充分にその天賦の性能と慾望を伸し、自由に文化を享け樂しみゆくべきものであつたに係らず、事實に於ては、それを遂げ得るものは、社會の一部の人達に留まり、多數はその下積となつて、其人達の享樂のために、營々汗に塗れて、働きつゞけに働いて行かねばならぬ事になりました。つまり、各個人の慾望を互に恣に伸長し得る社會といふものは、空想であつた事が判つて來たのでありました。

## （五）

こゝに於て、現れて來たのが、御承知のあの社會主義でありました。この主義の主張に就ては、もう多くを云ふ必要はありますまい。ついぞ先頃まで、あんなに、この國の全般を風靡しつくしてゐたのですから。

その要點を云へば、人は自分たつた一人で生きてゐるのではない。社會を結んで互に生きてゐる。かうして日々の我々の生命を支えて行く生活の資財は、悉く、社會の多數の樣々の力が寄合つて出來て來てゐる。この衣食住等の外のものが社會多數の見えざる力によつて得られてゐるものなるのみならず、更に內部に省みて、我々の懷く言語、思想の末に至るまで、悉くこの社會によつてはじめて成立してゐるものなのである。社會を離れて個人はない。

それなのに、これ迄の社會は、個人がまるで獨り立して生きてゐるかのやうに、個人の恣まゝなる慾望をてんでに遂げることを以て理想としてゐた。であるから、社會は無政府的な統制なく弱肉强食の姿を呈して來た。そうして生活に於て特に重要なる經濟上の權益に就て、一部の獨占を來し、社會は富者と貧者の二階級に分れ、貧者は永遠に生

多く活苦の中に呻吟して行かねばならず、然もその人達の汗に塗れた努力は、何時迄も富者の享樂を支える爲にのみ役立つて行くと云ふ、誠に不公平かつ悲慘極まる狀態となつて來た。

この弊害を打破するためには、どうしても富者階級を打破して、その獨占せる經濟力を奪返し、社會大衆のものとし、こゝに統制ある新社會を建設して行かねばならぬ。それを戰つて取るために「萬國の勞働者よ、團結せよ」のスローガンとなつて現はれたのでありました。

この主張の中には、確かに、爭ふべからさる鐵石の眞理を含んでをります。それ故にこそ、よく時弊を衝いて、時代の共鳴を呼び、一時は全日本を風靡してその到らさる處無きまでの世論となつたのでありました。まつたく、私共は決してたゞ自分一人個人として存在するものでない。かうして生きてゐることの內容は、悉くこの社會大衆とその久しき歷史によつて與へられてをる。社會と其歷史を離れて現在のこの自分は無い。自分の現にかうして生きてゐるのは、數知れぬ樣々の力に依て支えられてゐるからである。謂はゞ「緣起」によつて生きてゐるのである。それなのに、この事を顧みずたゞ自分の一個の欲求のみを中心として生きて行かうと云ふのは、卽ぬ眞理に逆行してゆく行き方である。かゝる誤れる個我の慾望を中心とした生き方が互に鬪ぎ合つて、それで善き社會が產み出される筈はない。種々なる悲慘事がやがて陸續として、この社會に生じて來たのも、思へば、當然の事でありました。

## （六）

然し、この主義運動も——やがて——全面的に蹉跌する時が來ました。そして、それに取つて代つて國家主義運動が俄然として擡頭して來ました。それは何故であるか。

社會主義の缺點は種々數えられますが、今の場合、詳しく立入つてゐる遑はありませぬ。一般に指摘されてゐる點を略してこの場合に關係ある部面から申上げますと、

（一）社會主義は、眞實の社會を建設する爲には、まづ現代社會の經濟其他の實力をも有してゐる富者階級から、それを奪ひ返さねばならぬ。其爲にはプロレタリアは何處迄も戰つて行かねばならぬと主張するのでありますが、靜かに、この運動の實際動いてゆく動力の在處を尋ねて見ますと、それは、プロレタリアが當然この社會に於て享くべくして奪はれてゐる割前を取戻すといふ點が、この運動の實

際の力となつてをります。つまり、享くべくして、享けてゐないものを取けずに奪ひ返すと云ふ、熾烈なる欲求が根となつてをります。この事は、やがてこの社會をやはり自己の慾望滿足のための道具として眺める先の個人自由主義の立場に歸するのであつて、未だ本當に「社會の爲に存する自分」といふ眞實の姿に成り切つてゐない。底に「自分の慾望の滿足」といふことが、横はつてをりますから、運動の實際に當ると「もう此邊でよからう」「いや未だだ」と各評價の標準を異にして、その爲その陣營はバラ〳〵に分裂して來ることになりました。

（二）また、この主義は、世界全體をたゞ貧富の二階級に分ち、その間の鬪爭を以て、直ちに新社會を將來しやうと云ふのですが、この世界主義は現實に當つて見ますと、誠に空疏な觀念に過ぎない事が分つて來ました。素より私共は「世界の一員」であることは確がでありますが、それより先きに、特殊な血液と歷史と土地とに依つて團結した民族の一分子であつたのです。これは單なる世界主義的理想によつて容易く抹殺する事の出來ぬ嚴たる事實であります。この事實の上に社會主義は蹉きました。よく考へて見れば、空漠たる世界主義は——眞の精練を經たものでなければ——實はあの個人主義と同じ血のつながつた双生兒であつたのです。個人が實際の自分の歷史や環境に係ることなく、勝手氣儘に自己の慾望を恣にしやうとする心から浮んで來る空想に外ならなかつたのです。その意味で、こゝにも、あの個我主義の殘滓がこの主義にこびりついてゐるのが見られます。

それ故、今日すでに、資本主義の發展が世界一般に風靡して一段落つき、新らたなる經濟資源の展開の道がやうやく、挾まつて參りました共に、この主義の待儲けて居た樣に、世界は勞資の二階級の對立によつて、新らたな人類社會を產み出す事とはならないで狹く各國家はそれ〳〵の國境內に於て、その民族歷史を中心としてもつと現實的な協同社會を樹立しやうとする方向に進んで參りました。即ち、國家社會主義の運動がそれです。そうして世界に於けるあの主義運動も、矢張り、ソビエト露西亞といふ國家內の社會主義となつて、其中に肩を並べる事になつて仕舞いました。

## （七）

現時、我國に旺盛なる日本精神の運動も亦、この潮流に

應するものであるは、申す迄もありませぬ。然し、是れが我國にとつて、特に意味深い事は、かゝる傾動と共に、私共が久しく閑却してゐた「日本みずからを顧みる」といふ大切な反省が、玆に萌し始めた事です。

明治以來、私共は餘りも多く學ばねばならぬ事を、あの先進歐米諸國に持つてゐました。夫故、それを取入れる事が急務であつて、從つてそれだけ自分自身を顧る事を閑却してゐました。こゝに樣々の無駄な破壞や混亂を引起して來た譯です。然るに今や既に世界最高文化の水準に達すると共に、此潮流を受けて、俄然、日本は日本自らに依て理想社會と共文化を建設する急務に迫られ、こゝに往古、世界に比類なき、光輝ある我民族歷史を改めて顧る事となりました。

最早、日本はたゞ世界に追隨するだけが能ではない。寧ろこの光輝ある歷史を本源としこゝに東西の精を合採したる、新たなる理想文化社會を創成して、夫を以て却て世界を指導して行かねばならぬ地位に立つて來ました。云はゞ、こゝに內外異常なる大轉回をせねばならぬ場合に際會したわけで「非常時」と云はれるのは正にその故です。

この重大なる時期に際して、私共の深く考慮し反省せねばならぬ事は多いのです。然しこゝには、もう餘白も短い。刻下の狀勢に對し思ひつくまゝに二三箇條書に致しましやう。

## （八）

（一）前申しましたやうな事情で、刻下の狀勢は、從來の傾動と異つて國家的なものに、或は歷史的なるものにと云ふ風に、一寸見ると一步後に後退して行くものであるかの如き觀を呈しております。それで一方では譯も無しに「反動的」といふ聲が擧りますと共に、他方では、もう是れで先頃まで八釜敷かつた社會問題なぞも、有耶無耶になつて終つた如く思ひ、矢張り以前の個人の力に任せてその分取りの狀態に歸つて來たと早斷して、このドサクサまぎれに甘い汁を吸つたが勝だと云ふ氣風が何處となく胚胎して來た事を見免せません。

然し時世の大勢は決して逆戻りして來たのではない。むしろ公正眞實なる社會を現實的に實現する爲に、先の空想的な世界社會を排棄して、既に一味に凝集せる國家社會に依て是を達成せんとしてゐるのです。その事は、最近の轉回に強い彈機となつたあの反亂軍の人達の絕叫は——巷間

傳える處によりますと——また資本家の横暴に對する鋭しい憤激の色彩が濃かつた由によつても察せられます。時世は爭ふべくもなく刻々、個我主義を排撃して、社會全體による眞實生活へと進んで行きます。人生の意味も、個人が恣に社會の利便を獨占して自ら享樂することに無くて、この社會の多數と共に生き、多數の爲に盡すところに眞の價値と喜びとがある事に導いて行きつゝあります。卽ち「緣起無我」の實相に生くることにおいて、眞の道のある事に進んで行きます。これを早く自覺せねば其人はやがて醜き社會の劣敗者となるでしやう。

（二）日本精神の運動は、我國の歷史に歸り其精髓を取出して新たに鄙かして行かうとするものでありますから、一見保守的に見え、やゝもすれば、自らを誇つて他を蔑視すると云ふ狹い鎖國的根性に誤り思はれる傾向なしとしません　然し若し斯く考へる人があるならば、それは非常な謬でありましやう。日本の歷史はむしろ、その敢爲なる進取性に依て豐かに外國文化を採用しそれを巧に同化しつゝ絶えず其進展を續けて來たものです。これを斷つ事は、日本の誇るべき特色を自ら抹殺するに等しい。それのみではありません。我國民の活躍の場面は既に言ふべくもなく、世界の全土に擴がつて來てゐます。こゝに於て、他と角逐する處の實力は、たゞ如何にして速かにこの人類が刻々産出しつつ文化力を獲得するか否かに依て決せられる。民族飛躍の非常に際して更に急務なるは、胸襟を博うして他の長所を絶えず採取する事です。我民族は飽くまで眞理に從順なるものでなければなりません。

（三）また日本精神は、むしろ豫め確乎たる自信を具えて我が歷史を顧み、その精髓を求めんとするものでありまして、この點、明治以來初めての現象と云ふ事が出來ます。其爲やゝもすれば、たゞ濫りに自己の優越を賴み、急がはしく自己の長所を誇らんとする傾向を伴はぬではありません。日本の長所を探り自信深くそれを堅持することは、特に近い過去の歐米心酔の時代に顧みて、その重要なるを切感するのでありますが、たゞ夫のみに止るのは、其の道ではない。國民が自己の長所にのみ關心して守つてゐるべき時は、むしろ、國家の危難迫る防守的な立場にある時です。我國は既にかゝる時期を經過して、むしろ世界に向つて博く伸びんとしてゐる。此場合、たゞ自己民族の優秀性を誇示してゐるだけでは駄目でありましやう。それを以て、他に臨んでこれを招撫せんとしても、他はまた、秘かに自家

の民族性を思ふて内心に絶えず反抗するのみでありましやう。

日本精神の大志は、たゞに安價なる自己陶醉に陷つてゐる事でなかつた。この神州日本の光輝ある歴史に鑑みて、こゝに新らしく理想文化を建設し、次時代の世界文化の魁たらんとするにある。その爲の道は、たゞに自己傳統の優秀性に留まつてゐる事ではない。そうでなくて、こゝに將來世界市民の共に歸入せねばならぬ大公道を求め、むしろ、それに、我民族は魁けて全體を献げてゆく事でなければならぬ。自ら自身を誇ることでなく、自らの背に負ふところの顯赫たる大道によつて世界大衆に向ひ行く事でなければならぬ。

事實、我國の歴史を顧みても、日本はたゞ自らの優越を誇る事によつて發展して來たのではなかつた。むしろ、宇宙の眞實大法にこの清白なる民族を献げゆく道においてこそ、その森嚴無比なる歴史を展開して來たのであります。この意味において、私共は、遠く我國文化の祖、聖德太子が、この國の文化の進み行く基礎に、先づ「宇宙眞實の大法」への歸依を置き給ふ事に、今更ながら深き意味を感ずる次第であります。

―をはり―

## 成功の定義

或る人が「成功」と云ふ言葉の定義を左のやうに拾ひ上げました。氣に入つたのを御採用下さい。

**い**　自己が出發した場所と現在自己がゐる場所との距離によつて計り得るもの

**ろ**　實行に移された正しい思想の連續

**は**　普通の頭を使つて普通以上の仕事をすること

**に**　機會が來たら逃さず把へる才能

**ほ**　能力以上に嚙み取つてから、それを嚙みしめること

**へ**　夜遲くまで起きてゐるかどうかで決るものではなく、晝間しつかり眼が醒めてゐるかどうかで決るもの

**と**　他人の成功を頭痛に病む限りは決して到達し得ないもの

**ち**　働く習慣が出來たら、もう半分はかち得たと同じやうなもの

**り**　自分の好さなことを爲すことによつてではなく、自分の爲すべきことが好きになることによつて始めて得られるもの

**ぬ**　懷手してゐては決して昇れない梯子のこと

**る**　自分の仕事を確り計畫し、その計畫に從つて確り自分の仕事をすること、

**を**　決心が決めるところのもの

**わ**　始終何かしてゐることではなく、始終何か仕終へてゐること

**か**　現在自己の立つてゐる場所に關係なく、自己の動いて行く場所に最も關係のあるもの

# 特輯……育てるもの・育つもの

## 鳥の情

中西悟堂

或る年、三十二羽の雀を養ひ育てたことがあつた。雀を入れてある籠を一列に並べ、一つ一つの籠の入口をあけて洗濯ばさみで止めてをく。私は手に飯粒を持つてそれを籠の中の雀に見せながら、「チユッ」と口を鳴らす。と、どの雀も一斉に「チリッ」「チリッ」と弾むやうな聲をあげて、籠の外へ飛び出し、私めがけて集つて來る。私は二三歩後退りをして、又「チユッ」と口を鳴らす。雀も亦それだけ前進する。私は又後へさがる。雀も亦それだけ前進する。恰度立つて歩くことを覺えた我が子に向つて、母親が手を叩きながら「ちよち〳〵あわわ、ここまでおいで」と言つて後退りをすると、子供がそれにつられて、兩腕をひろげながら母親に向つてゆくのと同じやうな鹽梅である。やがて室から廊下に出る。廊下から玄關へ、玄關から砂利を敷いた庭へ、庭から門へ、さうして斯ういふ風にして往來へつれ出す。ときく飯粒を與へながら、家のまはりをぐるりと廻る。

通りかかつた人が、この光景を見て近寄つて來た。

『何の鳥ですか。それは？』

と私に尋ねるのである。

『雀です』

と私が答へると

『へえ、それが雀で——』

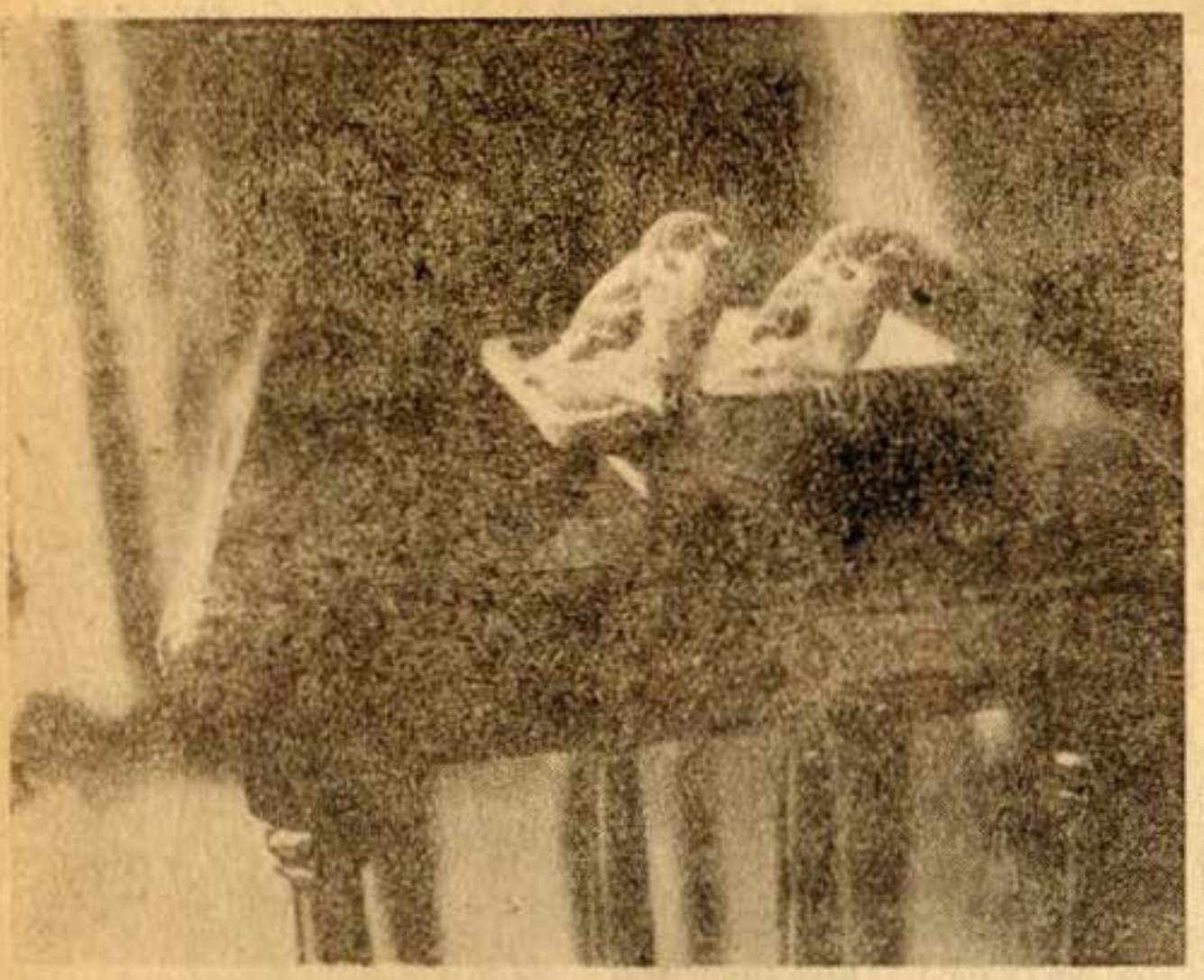
と呆れ顏であつたが、やがてのことに思ひ入つた口調で

『あなたは雀の學校の先生ですか』

ときく。私はふやく〳〵といふやうな曖昧な返事をしたが、心中

では『全くさうだ。雀の學校の先生に違ひはない』と同感したのであつた。

聖フランシスが小鳥に說敎してゐるところを、ジョットオが繪にしてゐる。リユクサンブルグ公園の雀たちをお爺さんが呼び寄せる話も知れ渡つてゐる。が、やつてみればさういふことは誰にでも出來ることなのである。ただ本氣になつて雀を可愛がればよいことなのだ。もつともただ可愛いいと思ひつめてゐたところで相手は育つてゆくものではない。餌の加減はどう？　水浴はどう？　蚊を防いでやるにはどう？と、一々飼育の知識は心得てゐなければいけないが、それからあとの技術はもう愛情次第でいくらでも進んでゆく。本氣の愛さへあるなら、どのやうにでも工夫はつくものである。



放飼の雀　（筆者撮影）

○

或る年の初夏、私の家に接した針葉林にモズが巣を營んで五羽の雛を育ててゐた。雛だちの肥立ちはよく、親鳥も夢中で雛を養つてゐた。

或る日、このモズの雄親が空氣銃で打落された。プスツ、プスツといふ小さい銃音がするので反射的に外へ飛出てみると、哀れにもモズの雄親は既に射殺され、次いで雌親も彈を肢に受けて、一方の肢は附根からぶら〳〵してゐる。空氣銃を持つた男は私を見ると逃げてしまつたが、望遠鏡でよく注意してみると、雌のモズは腹のあたりを鮮血に染めてゐるのだ。私は、あんな負傷で、雛に餌が運べるかどうかと思つた。況んや雛はもう巣立ちに近くて貪食なのだ。そこでもし雌親が餌の運搬に困るやうなら私が代つて雛を育てようと思ひながら、尙も雌親の行動を二時間あまりも注意してゐたが、苦痛と驚愕に度を失つてゐたのもほんの僅かの間で、あとはもう自分の受けた災厄のことは打忘れたかのやうに熱心に雛に餌を運んでゐる。

# 育てるもの・育つもの

その光景は私を打つた。この小さな生物の悲壮な努力が示してゐるものは、自然の一隅に於ける、母性愛の劇的シーンであつた。本能といつて仕舞へばそれだけのものである。が、顧れば人の母のその子に對する愛情も亦、決して理屈で出來あがつた作者の道徳ではない。「愛すること」は、凡そ生命あるものに特權として賦與された、命の光、生命の徳性なのである。

畢竟、人も鳥も愛することの根源の力には變りのあるものではない。

○

雀にかへつて言へば、雀はあらゆる鳥のうちで最も人間生活に近いもので、人家のないところに雀はゐないのである。それにも拘らず、人間そのものには容易に親しむことなく、又雛を育ててみても、雀の雛ほど馴らしにくいものはない。反對に人間といふものに殆んど觸れぬ八ヶ嶽あたりの山奥の留鳥は、却つて平氣で人間のそばへやつて來るのである。嘗て私は八ヶ嶽の行者小屋附近で、ステッキを杖にして山登りの足を休めてゐるとき、私のそばへコガラの類が集まつてくるのを經驗したがその場所ひとところだけではなく、又二三町も登つてから立つて休んでゐると、私又の身邊へ寄つてくるのだつた。試みにリュックサックから食パンを取出してその粉をまいてやると、小鳥たちは私の足許に近づいてそれを啄み食べるのである。私は「幸福な鳥よ」と思ひながらも、又同時に自分自身を幸福に思つた。

つまりは、人間に遠ければ遠いほど鳥は人を怖れず、人間に近ければ近いほど鳥は人を怖れるのである。奇妙な現象だが、畢竟鳥は人に親しむ方が本當なので、人を怖れるのは、人が鳥線をはなれ、子供ながらも、誰からも教へられぬ本能の力によつて、敵をカムフラージする卍字飛翔を始め、親は又親で、子供を庇ふ本能から、その周圍を護つてゐたのである。

○

又或る時、私は二階の窓の近くにある電線に五羽の燕の子が並んでとまり、雌雄の親が、誰たちの爲に交互に餌を運んで食べさせてゐるのを眺めてゐた。

と、突然、誰たちが一齊に電線を離れたのである。誰は一羽一羽に、空中のひとところで卍字飛翔を始めたが、五羽全體としては直徑一メートルばかりの球態を呈し、二羽の親鳥は、それの周圍を帶のやうに卷いて飛ぶ。その形は恰も土星をめぐる土星の環のやうであつた。

何か異常なことが起つたのに違ひない、と私は思つた。親鳥の限りを注意してみると、どこと言つて異常なものは無かつたが、唯一羽の鳶が、恰度燕の上空を低く舞ひ下りてゐるのである。原因はこれだ。大きな鳥の影を認めて燕の子供達は急に

を苛める習慣があるからなのである。

何の罪もない可憐な生物、まして空中から歌を地上にふりまく獣びの生物、森林の昆蟲を食物としてゐる爲に却つて人間の役に立つてゐる生物。——かうした生物に怖れられるやうでは、人間の恥ではないか。國防などにいきり立たなければならぬことも人間そのものの恥辱小鳥にすら親しまれないことも人間そのものの恥辱。人間性といふものが、そんな程度のものだとは、どうしても私は考へたくない。

○

さういふわけで、小鳥から、人間に對する警戒心を取去ることが、飼鳥の要旨だと私は考へてゐる。小鳥を射つて樂しむことは下品の樂しみである。小鳥を籠に飼つてその鳴きを樂しむことは中品の樂しみである。ヒガラやウグヒスの鳴合せ會をやつて賞を爭ふのも聊かさもしい。鳥を友として遊び、鳥人のあひだに隔ての一線がなくなつてこそ飼鳥の意味もあると言へよう。

よく人に馴染んだ鳥が、人間の目にそれと氣附かぬ内臟の病氣のために落命する二三日前は、俄かにその飼主に異常な愛着を示すものである。私の經驗中の二三を拾ひ上げてみると、一羽の瞳病なパンが、それまではどうしても私の膝には來なかつたものが、死ぬ三日前から急に私を慕ひ始めて、私の膝に乘り、私の指先にとまるやうになつた。この樣子では二三日中に死ぬのかも知れないと思つて、あはてて健康狀態に注意し出したが、もう遲かつた。パンはそれから三日目に死んだ。

又私によく馴れてゐた一羽の黃鶸鳥が、今までゝ馴れ方とはちがつて、急に私に愛着し出した。私が歩いてゐれば私の踵から離れようとせず、一つの部屋から次の部屋と、ぴつたりくつついてくるのである。又私が試みに横に寢れば私の身體に飛び乘つて、振拂はうにも離れないのである。これもあやしいと思つてゐたが果して三日目に死んだ。

生きてゐる者は誰も同じだ。小鳥も亦、自分の肉體から、自

親鳥の運ぶ餌を待つてゐる雛たち（筆者撮影）

# 育てるもの・育つもの

分の生命が遠のいてゆくのを意識して、何者にでもすがりたいのだ。さうして畢竟今まで自分に一番やさしかつた私を慕ふことによつて、自分の淋しさを紛らさうとするのである。さほどに意識的ではないとしても、要するに同じことだ。少しづつ増してゆくおのれの生命の空虚を、他の愛で埋めようとするのであるが、それにしても可憐ではないか。

人と鳥と、左程に違つたものではないといふことを、私はこの一事によつても立證したい。

○

しかし馴らした鳥に獨り遊びを覺えさせることも亦必要なことだ。あまり甘やかし過ぎて身邊を離さずに置くと、飼主がゐない時にヒステリーのやうな狀態になり、その結果は神經衰弱症になつて落命する。つまり快々として樂しまないため、餌を食べなくなつたり、腦に異常を來したりするのだ。

現在私の家にゐるヨシゴイなども、以前はその一例で、一週間三週間といふ山旅に出てゐるあひだは、すつかり不機嫌になつて、留守居の誰が與へる餌をも受附けようとしない。無理に口を割つて餌を入れてやつても吐き出してしまひ、普段なら日に十五匹のドゼウを食べるところを、二匹ぐらゐしか咽喉を通しはしない。だから旅から歸つてみると、見るもげつそりと痩せ衰へてよろめくばかりになつてしまつてゐる。

キズにもかういふのがあつた。やはり餘り甘やかし過ぎたために、私といつしよでなければ片時もゐられないといふ鳥になつてしまつた。朝から晩まで私を慕ひ通すため、到頭ふら〳〵病を起して死期を早めた。

しかしこの事にしても人の情、鳥の情にどれほどの違ひがあるかと思ふ材料がある。あるひは鳥が通有性として持つてゐる嫉妬の情の如きもさうで、幾つかの鳥を飼ふに當つて依怙贔屓は禁物なのだ。

私の言つてゐるのは、しかし知識の世界のことではない。どこまでも情の世界の消息である。

（以上私の飼鳥に關する話はすべて放し飼ひの話である。）

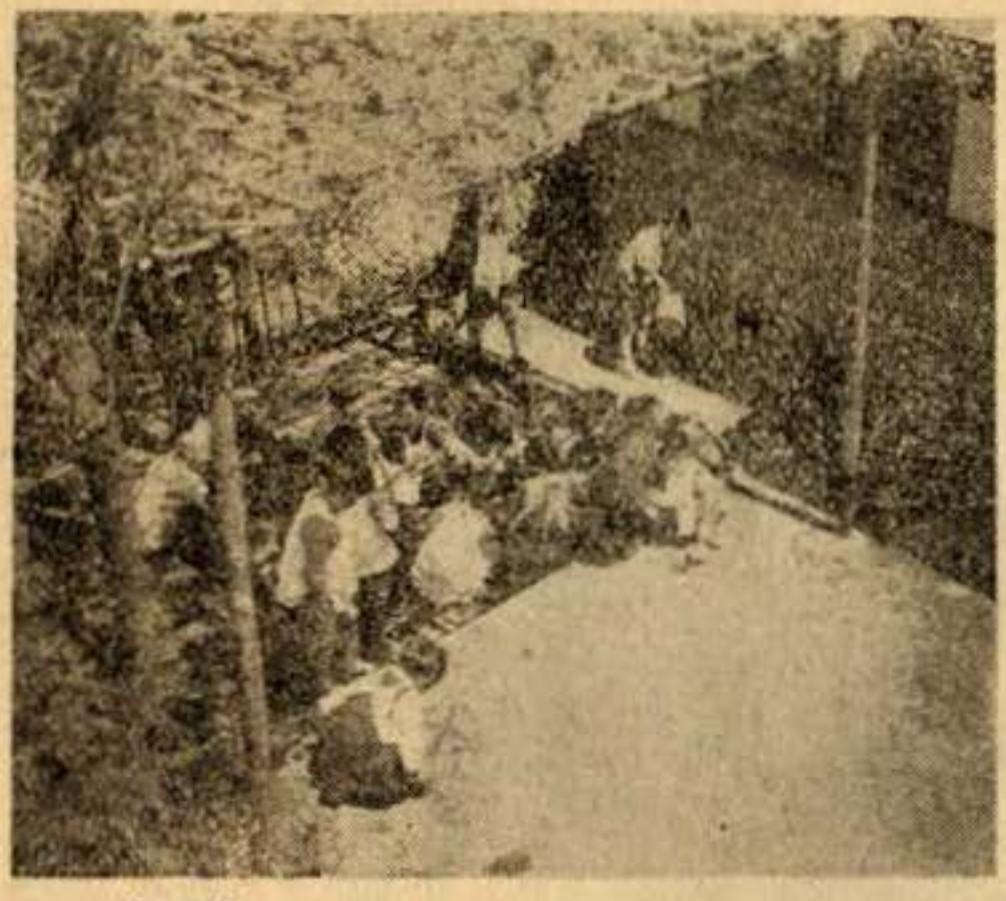
## 復讐する鳥

——アフリカのグンブ河畔にゐる密鳥と云ふ鳥は密蜂の巢を捕し出しては、そこへ人間を誘つて行く、だが、若し人間がその御禮に探し出した密の幾分かを與へないと、この不思議な鳥は、その次には必ず人間を猛獸や毒蛇のゐる所へ誘ひ出して復讐するそうである。あゝ外國人がこの鳥の案内で、しこたま密を集めたが、その中好奇心から果して密鳥が復讐するものかどうかを試めすため一日の密の分前を與へなかつたところ、本當に仔を連れた一匹の巨大な犀のゐるところにおびき出されて危く命を失ひかけたそうである。

# 大空に伸びる

## ——子供は草の芽だ——

内山憲堂



### 序

絲なるひとつ
　草とぞ春は
　見し
秋はいろいろ
の花にぞあ
りける

これは古今集の歌であるが、吾々が子供に對する時の一つの教訓とも なるやうに思はれる。

どうかすると子供を「絲なるひとつ草」と考へて、大人の型に嵌めて仕舞ふやうな場合が多いのである。

若芽には若芽の力がある、その力は決して大人が想像してるやうな、弱々しいものではない、否、大人の持つてる力よりも、大きく、強く、美しいものである。

伸びる若草の芽の力強さよ。

### 一

想像は發明の母であると云はれてる、すべての發明、發見は想像力の結晶である。

秋晴れの朝、園兒をつれて、近くの小學校の運動會を見に行つたことがある。時々打ちあげられる花火の高く登つて空中に殘つてる白煙を見て一園兒が

「あゝ、わかつた、花火が空へあがつて白い雲になるんだよ。」

# 育てるもの・育つもの

子供の人形芝居を指導する内山憲堂氏

昨年の夏である、子供たちをつれて海へ行つた。お晝前は波が荒かつたので入れず、晝飯をたべさせた、子供たちは海へ入りたくてたまらないから、「波を見てくる」と云つてかけ出して行つたが、急いで歸つて來て、

「今、恰度いゝよ、波がお晝御飯をたべに行つてゐるから、波がないよ……。」

子供の想像力の偉大さ、強さ。

子供は大發明家である。

## 二

藝術は自然の表現である、ありのまゝの姿を如何に表現するかと云ふことによつて藝術作品の差が生れるのである。

幼稚園で子供たちにバスケットボールをさせた。赤い毬が一つ廻轉窓の間にはさまれてゐるのを見た子供が、

「先生、お窓が赤いお手毬を上手にたべてゐますよ。」

ある夏のことである、明子さんが、

「お休みに湯河原へ行つたのよ、私の隣りのお家に、ミラーさんと云ふ西洋人がゐましたよ……。先生、西洋人つて、お鼻がぶらぶらなのね。」

西洋人の鼻の大きいことを大人は鷲鼻と鉤鼻とかの程度の表現しかなし得ないが、「ブラブラ」と表現したのである。

子供の表現の奔放さ、輕妙さ。

子供は大藝術家である。

## 三

大人の觀方は正しさを缺く場合が多いが、よしんば正しい觀方をしても、自分の利害のために、又は社會情勢のために、あるのまゝに發表することが出來ない。一代の思想家と云はれた人が、時代の流行に敗れて豹變する例をあまりにも多く見せすぎられてゐる。

滿月の晩であつた。今上つたばかりの月を「大きな月だなあ」と感心して見てゐた子供たち二人が、夕餉をすまし再び眺めてゐたが

「なんだか、少し小さくなつた樣ね」

と云ふと弟が、

「あたりまへだよ、あんなに高く昇つたんだもの、小さく見えるさ。」

動物園へ行つた時のこと、キリンを見てゐた子供たちが、

「キリンつて首がながいのね、身體はそんなにながくないよ。あれ、ハッパ(葉)の御飯をたべるためにながくなつたのだよ。」

子供の觀察の自由さ、明確さ。

子供はありのまゝが發表出來る正しき思想家である。

## 四

フランスの革命を背景として描かれたるユーゴーのレ・ミゼラブルを讀んでその創作力の大さに感心するのであるが、子供の創作の中にもユーゴーの卵を見出すことが出來る。

園兒たちが自由畫を書いてゐた、信三さんが、人物を畫用紙一ぱいに書いたが、人が大きくて片手だけしか書けなくなつた。

「おや、右の手が書けなくなつたから丹下左膳にしてやれ」

信三さんは左の眼の上に一本黒で線を引いた、すると隣りにゐた忠夫さんが、

「眼がちがフア、丹下左膳は右の眼が切れてゐるんだよ」

と云ふと、信三さんは平氣なもので、ヨシと右の眼の上にも一本線を引いて

「ヤー、南丹下だ！」

面白いのは子供たちの自作謎である。

「小さい箱の中に小人百人何に？……煙すだよ」

「木の上から蒲團を着て落ちて來るもの何に？……柿だよ」

「お皿の上に南京豆一つ何に？……電氣が消えたとこ」

「むいてもむいてもなくならないものは何に？頭の毛だよ」

「原つぱの中に梅干一つ何に？……お臍だよ」

子供の創作力の自由さ、大さ。

子供は大文豪である。

# 育てるもの・育つもの

## 五

宗教の根元は同情である、佛教では仁と言ひ、基督教では愛と云ひ、佛教では慈悲と呼ぶ。

子供の同情心は無生物にまで及ぶものである。

園兒が雪ですつかり掩はれてゐる花壇を見て、

「草やお花は隨分可憐さうね、雪がつもつたら花が咲かないよ雪をとつてやるといゝのになあ。」

ある時、男の子が椅子を壞して脚を折つた。女の子が二三人で、

「先生男の子が椅子を壞しました、脚を折つたのよ。」

中に高子ちやんが

「先生、可憐さうね、今晩泣きますね。」

何と云ふ子供の同情心の美しさ、やさしさであらう。

子供は大宗教家である。

## 結

私はこゝに十ばかりの子供たちの生活の斷片を羅列したに過ぎない。毎日子供に接してゐて子供たちの伸びようとする力のいかに大きく強いかと云ふことに驚かされてゐるのである。

やがて、今日の若芽の中から世界的な大文豪、大發明家、大思想家、大宗教家が生れるであらうことを忘れてはならない。

伸びよ若芽よ、

大空に高く——。

## 恐るべき習慣

銀座の夜店の中に、時々古道具屋がまじつてゐる。比較的大きな店も出てゐるが、所謂『ごみや』と云ふのであらう、ほんの僅かばかりの品物を並べて賣つてゐるのがゐる。或る晩、その前を通りかゝると、會社員風の男が、その古道具屋をひやかしてゐた、そこに並べてあつた、明治何年發行と云ふのであらう、今のよりずつと大形な五十錢銀貨をいじくりながら、

『これは幾何だ』

とその男がおやぢに聞いてゐる。『五十錢だ、』と云ふ。考へて見ると、形は古くても現在でも通用する五十錢銀貨を店にならべてそれを五十錢だと賣てゐるのも可笑しな話だが、その素見の男の云ふことがまた振つてゐた、

『どうだ、四十五錢に負けないか。』

古道具屋で物を買ふ時には、何んでもまかさねば損だと云ふ習慣を忠實に實行した譯なのであらう。結局五十錢で買つて行つた。

# 朝顔餘談

木村曾根

朝顔につるべ取られてもらひ水

誰れでも知つてゐる句だが、下手な朝顔作りの私には盡せぬ味のある句だ。

私は餘程以前、病上りの身體を暫く休養させる暇に朝顔いじりを始めてから、毎夏朝顔を樂んでゐる。然し樂んでゐると云ふだけで、未だ我流栽培、技術的に格別の進歩をしたと思はないが、花に對する愛情は年毎に深くなつて行くのを感ずる。草木だつて生物だと云ふ心使ひは一般の人には仲々飲み込めない體驗らしい。

兎に角、朝顔が種子蒔の八十八夜から、開花までの七十日以上の手數と心勞は並大低のものではない。先づ養土、小砂利、肥料など栽培に必要な一切の準備、いよ〳〵種を下して發芽までの世話と待遠しさ、變つた色でも出やうものなら、それこそ大自慢だ。自分の子を育てるやうなもので、「立派な花を咲せよ。大輪の花をつけよ！」と日がな一日念じ暮してゐる。

本鉢へ移してから、支柱を作り、用意して置いた肥料をやつたり、灌水の手入れ、臭いのも、暑いのも、立派な花に育てやうの一心で樂しい勞働に代つてしまふ。

もう、うつかり朝寢坊はしてゐられない。いや、朝になるのが待遠しい。

赤ん坊の手をとつて、一歩一歩を喜ぶ母親の氣持はかう云つたものだらう。一種の陶醉境、三昧とでも云つたものか。花と人との隔ては取り除けられて、自分自身花になつたやうな氣持に、ひよつと我れながら吃驚する瞬間があるものだ。

○

或る時、私は御用聞に來た小僧が、うつかり鉢をいぢつたのを見て、

「こらツ！」

# 育てるもの・育つもの

と一喝したが、それは自分でも驚く程、凄じい見幕だつた。小僧も餘程驚いたと見えて、暫くはあつけにとられてゐた。私も少しばかりでれて、その小僧を握へて、朝顔と云ふものが如何に可憐なものか、どんなに苦労と楽しみが、この一鉢に籠つてゐるかを醇々と說いて聞かせた。それからその小僧さんは朝顔の傍へは來なくなつた。可笑しな話だが、自分の氣持に嘘は付けないものである。

七十日の苦労が報ひられて、花が咲くその喜びは一寸言葉では云ひ現はせない。毎朝花の數を算へるだけではなく、本當には解らないから、文句を云つても甲斐がない。模様、簡色なぞ、一つ一つが自分の丹念の結果であり、己れの苦心と花の生活力がこんなにも見事に（自分だけでは少くともそう感ずる）實を結んだ嬉しさをしみ〴〵と味ふのである。

何時か、友人で是非一鉢貰ひ度いと云ふ者があつて、我れながら幾らか自慢の出來る大輪をやつた處、暫くして訪ねると、あの花は枯れて仕舞つたぜとのんきなことを云つてゐる。私は灌水や、施肥は、とくど〳〵と尋ねると、へえ、そんなものかね、と云ふ返事で、これは相手が悪かつたと微苦笑して引下つて來た。花を愛する氣持ちは、育てたことのある者でなければ本當には解らないから、文句を云つても甲斐がない。

もう、花は生きものであり、大袈裟に云へば自分の命の一部分がその中に燃えてゐるやうにも思へるのだ。そして自分ばかりか、苦労を分つた家中の者が喜び、これを見る客人までが樂んで呉れる。花さへも喜ばし氣に見えるのだ。

○

未だ自分で朝顔なぞを栽培しなかつた時分は、どんな花も大して氣にもしなかつたが、上手下手にかゝわらず、我が手で栽培して見ると、他人の栽培の勞苦を憶ふからばかりではなく、花の命を感ずるとでも云ふのか滅多に亂暴なことは出來なくなる。しほれかゝつた花でさへ、簡單に埃箱に捨てるのは氣が咎める。育てるものと育つものとの情合であらうか。

「早起きは三文の得」と云ふが、朝顔作りの早起きは損得づく

を超越してゐる。早起きと栽培の労苦は確かに私に健康を贈しはしたが、そう云ふ得は損得を超越したところに来た餘得だと思つてゐる。六寸七寸もする稀代の大輪は、心から朝顔を愛する人の手によつてのみ出来るもので、本當にうらやましくなる。こう云ふ愛情は佛の慈悲とでも云ふのであらう。

○

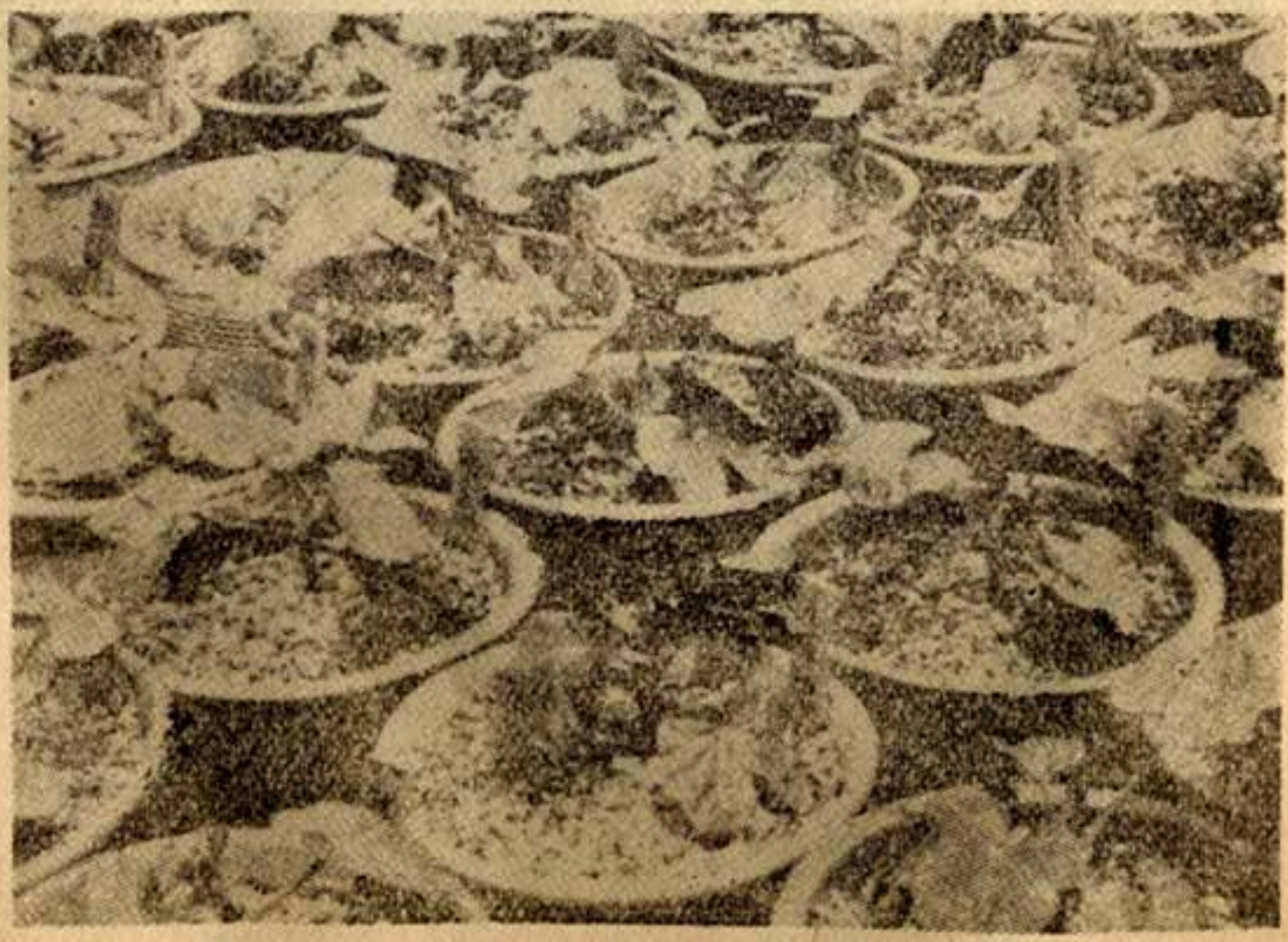
出来の良いのは押花にして何時までも藏つておく。人に見せると、中には何んだつまらんと云ふやうな顔をするものもあるがほう〳〵と熟心に感心して呉れるものもある。同じやうなものだが、御世辞にも賞められると嬉しい。

押花も一寸技巧の入るものだが、うまく出来ると殆んど變色しないから、開花年月日などを記入したり、その外の出来事なぞも一寸記入しておくと、仲々美しい日記になる。人が呉れと云つても手離し難いもので、かう云ふ風に花に對する愛着が色々な形でだん〳〵深くなつて行くのに自分でも驚く程である。

播種期が近付いて、これからまたいそがしくもあるが樂しい私だ。

徑草微微護二淺沙一　小山畿竹玉清家

牽牛延レ蔓無二多碧一　點綴秋光一兩花



朝顔や酒盛しらぬ盛り哉　芭蕉

# 貴族院の地藏尊

貴族院書記官　石橋德作

御存知の方も多からうと存じますが、私は不慮の災難で一子を失つて、一錢地藏建立を發願致しました。それから足掛け六年、只今ではこれに御賛同下さつた方が全國で、百四十萬、外國に在住なさる方が十萬人あります。この數字には私自身驚いておるのですが、また一面如何程佛の慈悲が深いかを知るものとして感激に耐えないのであります。

お地藏樣の原型は和田三造畫伯がお描き下さいまして、それは既に出來上つておりますが、土地選定その他に就いて目下愼重に考慮しております。何に致せ百四十萬人の方々の御寄進になるものでありますから、輕々しく扱ふ譯には參りませぬ。

○

このお地藏樣の爲に色々と活動いたしておる間に起つたことを二三お話しませう。

唯今貴族院の一室に地藏尊が御一體安置してあります。

それは同じ貴族院に勤めておられた或る方が、三年前の大晦日、用達の歸りに戶越の附近を通つておられると一軒の古道具屋の店先に東鄕元帥の書が掛つておつたので、それを見やうと中へ這入られると、一體の地藏尊がそこに置かれてあります。その方は兼々一錢地藏のため大變熱心に活動された方なので、その道具屋の主人に私のことを色々話しまして、

『貴方もそこにお地藏樣を置いてある位なのだから、一錢お出しなさい。』

と云ふと、その家の御主人は

『では五十錢差上げませう。』

と云ひます。

『いや、五十錢ではない、一錢です。』

すると主人は改まつて

『では私が一錢差上るよりも、その方にこの地藏樣を貰つて頂き度いが、どうでせう。』

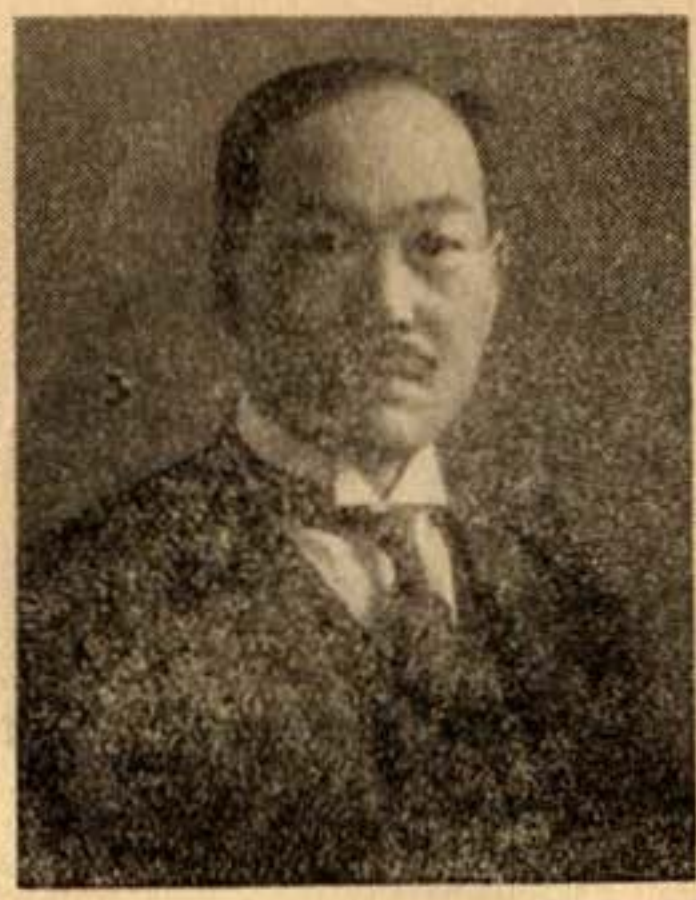
と大變熱心に申込んで來ました。その人も直ぐその場で返事が出來兼るので、一應聽いてからにしやうと云ふことで、その日はそれで歸りました。

年が開けて正月四日の御用始めに、その人が私のところへ來て、

『かう云ふ譯ですが、先生、貰つてやつて呉れませんか。』

と云ふのです。私も直ぐ頂くと云ふ返事は出來兼るので、兎に角、一應拜見しませうとその人と一緒に戸越の道具屋まで出掛けました。そのお地藏樣を拜見して、色々とお話しもし、先方でも大變喜んで是非貰つて呉れと云ふことで頂いて參りました。

うしろに「延命地藏」と書いてありましたが、一千年程經つたものだそうです。私はそれを貴族院の一室に安置いたしました。この場所は國家的に重要な處ですから、かう云ふ場所に地藏樣を安置するのは惡いことではないと私は考へております。



石橋德作先生

信仰心と云ふものは不思議なもので、地藏樣を安置しましてから別に私が云ひ付けるのでもなんでもないのですが、何時もその前に新しいお花を缺したことがありません。誰れがすると云ふことなしにそうなつてゐるのです。

お茶菓子などを貰つて來ても、先づ地藏樣におそなへすると云ふ風で、給仕なども行き歸りにはちやんとお地藏樣の前にお辭儀をして參ります。信仰的な感化と云ふものは自然に及ぼされて來るもので、誠に嬉しいことだと思つております。それに就いてかう云ふ話があります。

昨年の春、役所に臨時雇の給仕をしてゐた子供がありました。大變貧しい家の子供だそうでありましたが、それがふとしたことから病氣で亡なりました。臨時の者には特別な規定がないので、そう云ふ場合にも餘り優遇されないのですが、その時は私も出來るだけの面倒を見てやりました。

するとある日、その子の親が私を尋ねて參りまして、

『實に有難いことでした。息が亡つた時に役所の給仕さんが全部で香奠を集めて來て下すつた上、全部お揃ひでお通夜に來て下

さいまして何んとも感謝のしやうがありません。實は今日そのお禮に上りました。』

と云ふ。それまで少しも聞いておらなかつた話ですから、それには私も大いに感激しました。他人に教へられるのでなく、自發的に全部揃つて友達の通夜を勤めると云ふ氣持、——私が一錢地藏のために働いてゐると云ふこと、役所の中に人々の誠心の籠つた地藏樣を安置してゐると云ふこと、これらのことが自然に宗教的な感化を及すのでありませうが、これには感激もし、また私自身大いに教へられるところがあつたのです。

○

かう云ふ樣なことからして、私は信仰は行でなくてはならぬと考へております。

私は自分の子を失ひましてから、新聞で子供が不慮の災難で死んだ記事を見ますと、自分の身に引きくらべて何んともお氣の毒でならず、必ずその親御さんを御見舞申すことにしております。そう云ふ親御さんのお氣持は子を持つた者でなければ解らず、また私の樣に同じ不幸な經驗を持つた者が最も良く解るのです。

で、新聞で變死の記事を見ますと必ずそれを切り抜いて、その所番地を頼りに訪問し御見舞申すことにしております。ところが、始めの中は隨分と誤解をうけて、色々口では申せないやうなひどい目に逢ひました。中には香奠がへしの押賣りに來たんだらうと邪推する御人もあつて思ひ掛けない扱ひを受けたことも度々ありました。で最初の中は試驗の答案を見るやうな氣持、非常に不安な氣持で出掛けたものでありますが、近頃では私を知つて下さる方々も澤山出來、また私自身、そう云ふ虐待を受けることを却つて一つの喜びとするやうになつて來ました。そして只今では、それ等變死したお子樣の親御達で『かなしみの母の會』と云ふのを作りました。月々集つては互ひ

## リンカンのたゞのり

アメリカ第十六代の大統領エブラハム・リンカンだつて薩摩守をやつたことがあるのですゾ。

ことの起りはかうです。彼がまだ若い辯護士であつた時分のこと、或る冬の黄昏時、隣町から吹きつさらしの田舍道を獨りとぼ〳〵家路を辿つてゐました。寒さは寒し錢はなしで、乘合馬車はひつきりなしに通つてはゐるのですが、それに乘ることが出來ない。味氣無い思ひで疲れきつた足を曳きづりながら歩いてゐると、後から一臺の馬車が勢よく走つて來ました。見ると六十許の裕福そうな老人が一人乘つてゐるばかり。突嗟に、後世奴隷解放を叫んで高く揭げたその右手を、馬車に向つて差上げた。馬車が止まると彼は車上の紳士に近付いて恭々しく云ひました。

『私はこの先のスプリング・フイールドに行く者ですが、甚だ勝手な御願ひで恐縮で

に慰め合ひ且つ信仰の一助としております。

私はこれによつて親の愛と云ふものが如何に深いかと云ふことをつく〴〵感じるのです。一例を申すと、先頃横須賀で三匹の犬に咬み殺された幼兒の冥福の爲に建立された地藏樣の開眼式が三月廿一日に行はれました。大變雨の降る日でしたが、「かなしみの母の會」の會員達は東京から雨を突いて擧つてその式に列しました。ところが、矢張り列席することになつておられた市長は御都合でお見えにならなかつた。

そこで考へるに、日本の如き文明國の今日、犬が人の子を咬み殺すなぞと云ふことは考ふ可からざることである。ところがさう云ふ慘事が事實として現はれた。そして人々は驚き悲しんで今後決してかう云ふことがないやうにと、死んだ子の冥福のために地藏樣を建立した。その式に來るべき人で御都合もあらうが來られない方もある。かう云ふことは、だから、體驗のある者のみが最も良く理解することが出來、最も深く悲しみを共にし喜びを共にすることが出來るのだと感じたのです。だからかう云ふ方々が互ひに慰め合ひ、その愛を他の人々の上に及ぼすと云ふことは意義深いことではないかと思ふのです。

それにつけても親の愛、子を思ふ親の愛程深いものは私はないと思ひます。これこそ佛の慈悲である。佛の慈悲とは愛することと、それだけで滿足し、決して反對給附、その報酬を要求しません。子を思ふ親の愛もそれです。それは愛の根本です。だからそれは單なる言葉ではなくて行ひでなければいかぬとす。私は先に信仰は行ひであると云つたのはそれであります。

この愛を隣人に及ぼし、他人に及ぼすと云ふ事によつてそれは大きな愛となり、人は和かな團の中に生活出來るのではないでしやうか。

『そりや、お屆けはしませうが、外套無しでは君が凍て仕舞ふでせう。』

『いや、その御心配には及びません。私はこのお屆け願ふ外套の中にくるまつておりますから。』

そこで二人は大笑ひをして、リンカンは首尾よくその馬車に乘せて貰つたと云ふことです。アメリカらしい機智に富んだ話ではありませんか。

すが、この外套をスプリング・フイールドの町までお屆け下さいませんでしやうか。』

車上の紳士は折から吹雪さへやつて來た多空に、しよんぼり立つてゐる若者を見て憫いて云ひました。

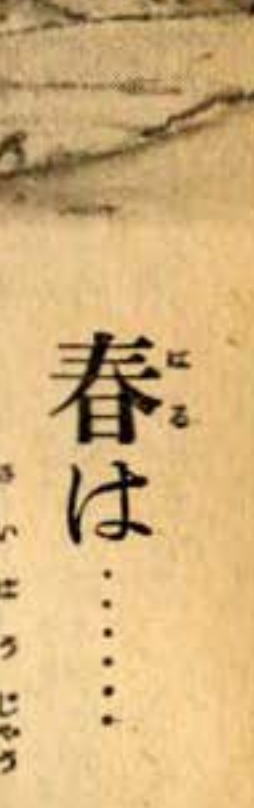
# 春は……西方浄土から

小島一谿（畫と文）

吹雪の北海道の山路を一日歩いた恐ろしさも湖畔の村の湯宿に落着いた酒のうまさと共に今は楽しい想出です。佐渡の小木で紅葉山人の滞在した部屋で其處での若かりしロマンスなぞ聴いて土地の藝者におけさを唄はした初夏の頃もなつかしい。酒の秋田でおばこ節をきき覚え十和田湖、田澤湖、八郎潟なぞの神秘にふれた陽春の旅も嬉しかつたが、春はやはり西方浄土と申し度い。その代表された吉野櫻を未だ見て居ないが、近く大和巡りの旅を約束したい。

京は春にふさはしくなまめかしく、舞妓の美！いたらりの帯と共に、紙園丸山の夜櫻はあまりに名高い。これはかつて伊太利美術展覧會に大觀先生が六曲一双に描いて、その東洋的な主題が東山を背景に咲き亂れた櫻に、かがり火の情趣を添へて大變に評判になつたと聞いてゐる。嵐山大堰川畔より保津川に至る松の間に點在する櫻の美しさは、全くの日本的な畫題だと思ふ。

「春ごとに思ひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲きけれ」と後嵯峨天皇が龜山仙洞に在ませし時、吉野山の花を嵐山に移させた時の御製だといふ。




## 罪を背負つて

鷲岸寺再建の大任を委ねられてから珂磧は眠る間もない程の活動を續けた。

或る日、突然珂碩は寺僧に向つて『子供で、淨財を盜んだものがあるぞ』と云はれた。直接金錢を取扱はぬ師の言葉ではあるが、取り敢へず調べて見ると果して、その通りであつた。寺僧達は『珂碩上人は偉い方だとは思つてゐたが、居ながらにして賊を知るとはこりや神通力でも得られたのか。』と感じ合つた。

ところが、工事も次第に進捗して來た或る日、今度は二千兩と云ふ大金が紛失した。檀家の人々も驚いて早速役人を遣はして調べさしたが、

ふのです。昔は紅葉の名所として知られ附近の小倉山も歌でなつかしい、去來の落柿舍も杖引くによい。

御室仁和寺の櫻は院展で京都の溪仙先生が二曲二双に製作し近來の傑作といはれ、故朝香宮妃殿下の御靈を慰め奉たといふ謹話も傳つてなつかしい。殿下御臨終御愛着の光榮の御室の櫻は御室御所とも呼ばれ、洛中洛外の花が散つて最後に滿開するので知られており、其の外豐公で有名な醍醐の櫻、東山清水寺の櫻、八瀬大原も、又比叡にも櫻はあつた。坂本に出て琵琶湖畔の春も惡くはない。もつと粹な所で加茂川べりの花なぞ京の舞妓なぞ連れて歩いたらばと考へた。

神戸に入つては六甲山つゞきの禿山も面白く明石海峽と鉢伏山の迫つた、「淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に幾夜寢ざめぬ須磨の關守」の歌の須磨寺の櫻が美しい。一の谷の古戰場も、前にひかへた白砂青松の勝景よりも須磨の若木の櫻花嵐と散りし小敦盛と淋しい平家琵琶の言葉を想ひ出す。その敦盛卿の首塚も寺の左に首洗井戸、義經公腰掛松なぞがある。

敦盛を考へると、どうしても熊谷直實といふ人物が目に浮ぶ、直實は千軍萬馬の中に勝ち誇つた坂東武者だ。それが世の無情を痛切に感じての求道から安心立命の法を隨所に求めて求め得ず遂に京都黑谷の庵室に一人の聖者を訪ね、しかもその修行の容易なるに驚いてさめ〴〵と嬉し泣きに泣いたとは名高い話で、私はよく亡父よりくりかへし〳〵子供の折に聽かされた懷かしい話だ。

其の聖者こそ淨土宗の開祖法然上人其の人。佛教を特權、有識階級より眞に己れ

どうしても解らぬ。

『誰か寺方で知つてゐる者があるに相違ないが、後難を恐れて云はぬらしい。が、云はねば云はせる方法がある。』

と、役人の一人が苦肉の策を講じた。それは入札、今で云ふ投票の方法に從つて、寺の人々が自分の知つてゐ嫌疑者の名を紙に書いて秘かに入れると云ふのである。名案には違ひない。

そこで、ふと、この事を珂碩の師、靈岸寺の住職、珂山上人に申込れた。上人も妙案だとこれを許されたので早送鐘を撞いて人々をよび集め、その計畫を實行した。

ところが、何事かとそこへ來合せた珂碩がその仔細を聞くや、突然その箱を取り上げて、火の中へ投込んで仕舞つた。あつと云ふ間に箱は犯罪の秘密を包んで見る間に一塊の灰となつた。

『山主のお許しを得たこの妙案、何

の無智を知つた時に救はれるといふ喜びを、平民的に教へて呉れた上人が流された讃岐に渡つて見る。

神戸を夜、船で瀬戸内海の静な夢を結んで翌朝早く高松に着く、明るい四國の自然を朝陽の中に感じて電車で金比羅神社に詣ずる、高い石段を寄進者の名のある無数の石を双方に眺めつつ登る、「金比羅舟々追手に帆上げてこらショー」と下町あたりで子供の時よく唄つた三味線の手を想ひ出す。

こゝ讃岐の琴平神社の繪馬堂に奉納の數多い船の額の空想がグロだが面白く眺めて時を忘れる。

朝の静かな境内の森の中から櫻の花が夢のやうに浮んで見え、遠く見下す平野の行く手にくつきりと讃岐富士がそして霧の中に陽を受けて白帆がかすかに見えて來る。平和な、そして春と共に樂しむ四國の自然の明朗さが……。

屋島は鷲龍に乘る興味の外に何か時代めいてその中に一役買つて出た源平を想ひ出す、幼い頃芝居の子役で舞臺裏で遊んだ時の鷲龍を手近く眺めるのも古い記憶だ。頂上の茶屋で蒸し鰈其の他の珍らしい肴で酒の量がふえる。平家の滅びたといふ内海壇の浦五劍山の下、今鹽田のあるあたり那須與一が扇の的を射たといふ話なぞ醉眼おぼろに其の幻影が目に浮ぶ。

雌雄島を初め島々の美しさも小豆島の大きい遠望も酒の肴によき存在だつた。

高松から船で宇野にそして岡山に出てこゝの公園の人工美に感心する、引きかへして姫路の白鷺城を背景にした櫻もまるで武家時代の俤其のまゝの感情で眺められる、高砂尾上の松や曾根の松も、そして舞子の濱も山陽故あつて邪魔立てなさるか。』

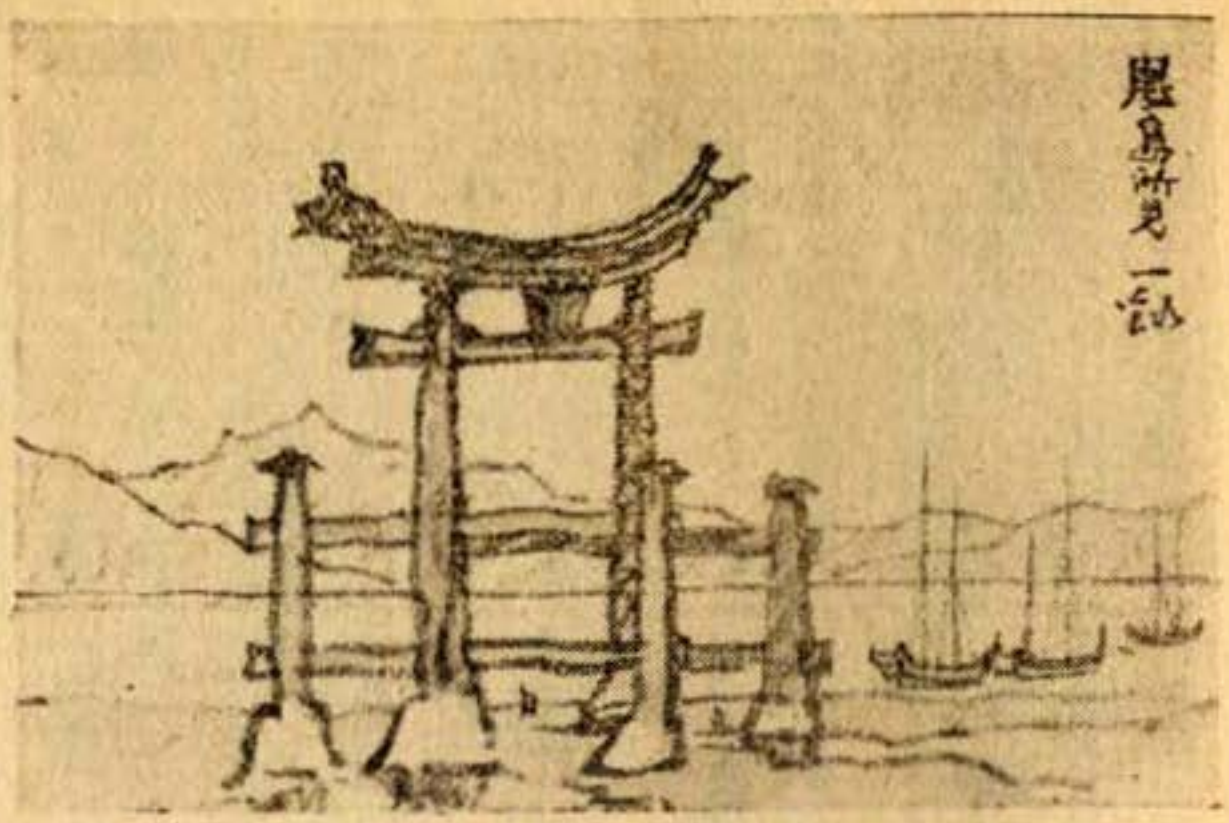
役人達は色をなして詰寄つた。だが、珂碩は平然として

『いや、申譯ない。無禮の段はお詫び申す。今更相すまぬ事なれど、その二千兩を盜んだは、誰れでもないこの高德の善知識が、そんなことをしようとは誰れも信ぜぬ。斯く申すこのわしぢや。隨意に處分して下され。』

と云ひ切つた。人々は愕然としたが

『衆物を圍まれようとする御慈悲の心だ。』

と云つて、誰れも手を出さない。そ




電氣鐵道で簡單に遊べるが福山を起點とした鞆行きの輕便に乘る。福山城は私の想像したより形が美しく城を中心に櫻會で賑つて居た、驛の直ぐ右に天主閣が見え、その遠のいて行く樣を輕便の窓より見てしみ〴〵日本のみの持つ築城の歷史など考へる。

鞆の津はまるで繪だ。このまゝ額に入れて部屋を飾りたい、櫻桃梨などが麥畑の間に點在し、その背景が仙酔島なのだから夢の樣な氣持で酔つて仕舞ふ。靜かな內海の春、面白い帆掛船の通ふ其の舟人として自分を置きたい程だつた、對潮樓と呼ばれる寺の和尙が素人畫を色紙や短册に描いて名所エハガキと共に賣つて居た。其の寺の直ぐ下が色街で、白粉を濃く塗つた女達が白晝旅人を招いてゐたのが古い港町の情景らしかつた。城山、太子堂あたりから見下す鞆の町、渡舟で島に渡るも惡くはない自然は本當に畫題其のまゝだ。

其の夜の福山泊りが雨で心配した、嚴島行きも舟で島に着く頃には霽れたがとても寒かつた。こゝは要塞の禁札に一寸出鼻をくぢられたが、看視の役人に聞いて山を描かなければ良い事が知れてゐた。何か物語りにでもあるかのやうな廻廊助かつた。

が打寄する波に姿をうつして浮び出てゐる美しさは、やはり日本三景の一つだと思つた。千鳥や鹿もやはり神苑といつた感じが十分にする。秀吉の歌に「聞きしよりながめ見あきぬいつくしま、見せばやとおもふ雲の上人」とあつた。これからまだ九州まで廻り度いのだが、紙數も盡きたから、一まづ此邊で足を休めよう。

仕舞ふ。靜かな內海の春、面白い帆掛船の通ふ其の舟人として自分を置きたい程だつた、對潮樓と呼ばれる寺の和尙が素人畫を色紙や短册に描いて名所エハガキと共に賣つて居た。其の寺の直ぐ下が色街で、白粉を濃く塗つた女達が白晝旅人を招いてゐたのが古い港町の情景らしかつた。城山、太子堂あたりから見下す鞆の町、渡舟で島に渡るも惡くはない自然は本當に畫題其のまゝだ。

其の夜の福山泊りが雨で心配した、嚴島行きも舟で島に着く頃には霽れたがとても寒かつた。こゝは要塞の禁札に一寸出鼻をくぢられたが、看視の役人に聞いて山を描かなければ良い事が知れてゐた。何か物語りにでもあるかのやうな廻廊助かつた。

が打寄する波に姿をうつして浮び出てゐる美しさは、やはり日本三景の一つだと思つた。千鳥や鹿もやはり神苑といつた感じが十分にする。秀吉の歌に「聞きしよりながめ見あきぬいつくしま、見せばやとおもふ雲の上人」とあつた。これからまだ九州まで廻り度いのだが、紙數も盡きたから、一まづ此邊で足を休めよう。

の中に感きわまつて、自ら名乘り出たものがあり、その者が眞の犯人であることが解つた。

然し寺僧の一人は師の行爲に不審を抱いて彼に尋ねた。

『先きに御師匠樣は　盜みをした小僧を御指名になりながら、この度は二千兩の大金を盜んだ者を何故おかばひなされましたか。』

『その不審は尤もだが、前の小罪は云へば悔ひ改め、それで濟むであらう。だが、二千兩盜んでは、これは公事であつて私事でない。白洲に突き出されゝば所詮死罪は免れぬ。だから、わしは云はなかつたのだ。暴虐を以て刑罰を加へたとてその罪滅するものではない。德を以てその心を悔ひ改めさせてこそ罪は消滅する。良いか、解つたであらうな。罪人を知つた快さに、罪を發いて生命を奪ふ如きは、慈悲を大本とする佛家の取らざる所ぢや。』

寺僧はこれを聞いて、大いに悟る

# 遊蓮房に誘はれて

前田聽端

## 一

「淨土の法門と遊蓮房とにあへるこそ、人界の生をうけたる思ひ出にては侍れ」（勅傳四十四）とは、わが宗祖法然上人の洩らされた、最も美しい、そして明るい、また最も意味深い御述懐の一つであらう。

この御述懐を思ふとき、私はいつも遊蓮房の人品に心が惹かれる。遊蓮房圓照は入道少納言通憲の子で、二十一歳には既に發心出家してゐる。はじめは法華經を暗誦したほどの「法華經の行者」であつたが、のちには法然上人の弟子となり、道心堅固　その一生を念佛に獻げた。傳ふる所によれば厭離の心（宗教的情操）深き行者で、いつとなく打ち涙ぐんでゐたといふことであるし、又常に淨土の曼荼羅（變相）を頭にかけ、止まり休むところごとに之を掲げて念佛したと云うてゐる。遊蓮房の求めたものは唯宗教することであつた。いのちすることであつた。魂の故郷を求むることであつた。故に法然上人の常に仰られる御詞は殊にあつた。

「煩惱のうすくあつきをかへりみず、罪障の輕きをも沙汰せず、たゞ口に南無彌陀佛と唱へて、聲につきて決定往生のおもひをなすべし」とは、恐らく彼は感激に燃え、幾度か歡喜の聲を擧げたであらう。心惹かるゝ所は遊

## 奪り難い金

法州上人が江戸から京に行かれる途中のこと、日も暮れ近く、獨り人里離れた山中を踏み分けて行かれると、何時しか一人の若者と道連れになつた。その若者の樣子を見ると道中ざしを一本ぶち込み、足ごしらへも嚴重で、すつかり旅裝束だが、別に荷物らしいものも持つておらぬ。上人も不思議に思はれて四方やま話の末

『そなたは何を渡世としておらるるな』

と問うて見た。と、相手は平氣な顏で、

『盜人の親分だ。』

と答へたものである。上人もこれ

ところがあつた。

珂碩——超誉と記す。武州の人、姓は野村氏元和四年正月一日生、珂山の門に入り、靈巖寺にあること廿年寂す。

蓮房の日常、所作よりも、寧ろ遊蓮房その人である、この人品、この人格の光こそ、その師法然上人から「遊蓮房とあひたるはこれ今生の思ひ出である」といふ實に意外な御述懐を蒙つた所以であると想像さるゝ。

## 二

私は今この尊く、懐かしき遊蓮房にあやかりたい心で一杯である。「名號をきくといふとも信せずば聞かざるが如し。たとひ信ずるといふも唱へずば、信ぜざるが如し。たゞ常に念佛すべきなり。」（勅傳・二十一）といふ詔聖の御法話を拜誦するたび毎に、わが足跡の覺束なさがしみ〴〵と感ぜられる。それは「われすでに此教（淨土の法門）の大旨を得たり。しかれども信心いまだおこらず、いかにしてか信心おこすべき。」（勅傳・十九）と歎いた或修行者の心でもある。

無論讀書も尊く、學問も尊い。しかし吾々に取つて最上の意義を有つものは生活であり自得であつて、決して讀書や學問ではない。唯讀書、學問の意義は吾々の生活、吾々の體驗、自得を基礎としてのみ成立するものとすれば、どんな聖典も此方に反省がなく、體驗が足りない限り、十分に理解し得ないのは止むを得ない。大聖釋尊や祖聖の持つた自信の力、大膽な表白の力、そこには何とも名狀せられない偉大な主觀が嚴存する。その偉大な主觀から溯現せる聖典や法語になると、それは吾々の反省が深まり、體驗、自得が大きくなればなる程、何處までも益々大きく慈々尊く見えるであらう。幾度讀み返しても常に新しい醍醐味を提供され、切なる慈教を了解せしめらるゝであらう。

離れを取るにつれて、だん〳〵と學問すること・宗教すること・の間に竟に一緒になることの出來ない間隙のあることを會得されてくる。生涯宗典を讀んで、しかも遂に至心信樂、念佛することの淋しさがしみ〴〵感ぜられる。宗典や法語を單に學問的に理解しようとすると、佛や慈教は私共より逃げ去つてしまふのである。禪勝房の言葉に、

「淨土宗の學問の所詮は往生極樂はやすきことと心得るまでが大事なるなり。」（勅傳・四十五）

には些か驚かれたが、流石に聲音も變らず、

『盜人なぞせず、眞面目な仕事なされたらどうぢや。』

とさとされた。ところが盜人はそんなことは耳にも入らぬと云ふ風で、

『今和尚さんの懐には廿兩の金があるな。だが俺は別にそれを取らうとは思つてゐないから安心してゐなさるがいいよ。』

とちやんと上人の所持した金高まで云ひ當てた。ことの外に思はれたが、そのまゝ又世間話に移

これが宗興を學ぶもの、正しき歩み方の典型である。

## 三

淨土にも剛のものとや沙汰すらん
　西にむかひてうしろみせねば

この歌をくり返し誦してゐると、抑へ難き厭欣（宗教的思慕）の情が湧いて、盡きるときがない。私は念佛行者の傳記を讀むとき、行者に共通な性質よりも個々の逸事により多くの關心を催す。

阿波介は性來極めて愚鈍であつたが往生の一大事が心にしみてゐるので二連の念珠を案出してゐる。性愚鈍であることは法性寺の空阿彌陀もその類であるが、生涯念佛の外には他の勤めなく、極樂の七重寶樹の風のひゞき、八功德池の波の音を戀ひ慕うて、風鈴を愛し、それを包み持つて、何處へでも行く度毎に、必ずこれを懸けたといふことであるし、又常に如來尊號甚分明、十方世界普流行、但有三稱名一皆得レ往、觀音勢至自來迎」の文を誦して「あゝ南無極樂世界」といつて涙を落したといふ。斯くの如きは無論特殊な例ではあるが、それにしても素直に阿彌陀佛の本願に打ち縋り、ぐん〳〵とお念佛を申す人は洵に幸福な人、人中の好人、人中の妙好人と言はねばならぬ。

今の私は容易にその幸福者、人中の好人たり得ない恐しさに堪へ得ないものがある。人界に生を受けたる思ひ出に、せめて早くこの恐しさから免れたい。南無阿彌陀佛。

つて暫く歩いて行つた。しかし盜賊の親分だと云はれたので上人も、それとなく相手の樣子に氣を配つてゐたが、一向に金を奪はうとする氣色もない。そこで上人が『金を取るのに、取り難いのと、取り易いのとありはせぬかな。』と問はれると、

『成る程、和尚さんは氣の付けどころが違ひますね。そりや六ケ敷のと易しいのとありますよ。非道を働いて出來た金はたと〳〵七重八重の錠を下ろしてあつても何か知ら取り易いものだが、眼の前に見る金でも、貴方のやうな德のある人の金はなか〳〵取れませぬな。何にやら身體がすくみ、手が震へて駄目なもんですよ。

と云つた。これには上人も大いに感ぜられたと云ふことである。

（法州上人、長　の人、明和二年四月十四日誕生、增上寺辨信登に學び、後諸國に敎化し、文化九年西圓寺に住す。天保十年寂）

國寶
法然上人御影　右左權太夫藤原隆信筆
（縱一尺四寸・橫八寸　銅本寫眞プロセス版　精巧典雅十數度刷）
精巧無比！　神々しき上人の御影は實に眞に迫るもの。上人を景仰し、念佛にいそしまれる方は是非朝夕座右にかゝげて恭敬せられよ！
一葉壹圓（送料不用）
申込所　法然上人鑽仰會

# 可哀さうな奴

ところは下谷幡隨院、

『泥棒だ！泥棒だ！』

と叫び聲に、あちこちの部屋からばた〳〵人々が飛出して來た。眞闇な上に澤山の足音で、なにがなんだか、唯、人々はうろ〳〵してゐるばかり。

この騒ぎに、幡隨上人も床を離れて、紙燭を採つて廊下に出られ、

『あまり騒ぐでないぞ』

と人々を制せられながら、とある部屋に入られると、片隅の革籠の置いてある蔭にちらり、着物の裾がはみ出してゐるのに眼を付けられた。で、紙燭をかゝげて良く御覽になると、確かに盗賊らしい。而も三人もゐて、身を寄せ合ひ乍らうづくまつてゐる。

『悪事を働く奴とは云へ、からなつてはさぞ恐ろしいことであらう。』

上人の眼には怒りよりも憐みの影が宿つてゐた。

何を思はれたか、その籠の上へどつかりと腰を下して仕舞はれた。何しろ上人は眼光烱烱、人を壓するやうな大入道で、その大入道が平然として而も優しい微笑までたたへて頭の上に座り込んで仕舞つたのだから盗棒も、もう駄目だと觀念した。

ところが上人は何食はぬ顔で大聲に、

『皆能く探がして見るが良いぞ、不届きな奴ぢやが、多分此の邊りにはゐないらしいあちらに隠れてゐるかも知れぬな。』

と云つてゐる。人々もう〳〵逃げてしまつたかと、諦めてそれぞれの部屋に引取り、一人も居なくなつたのを見すまして上人は紙燭を吹き消し、

『こりや泥棒！誰れも居らぬらしい。もう大丈夫ぢやから出て參れ！それ、この衣の中に隠れて一緒に來いよ。可哀さうぢやで、逃してやる。』

そつと暗に紛れて寺の垣の外まで連れ出し

『何れの者かは知らねど、親もあらうに決して悪事をするでないぞ。現世も安穏でなく、未來も地獄赤熱の苦しみぢや。わしの言葉を聞き分けて、明日から必ず正業に就いて世渡りしてくれよ』

と、さとされ、三人の盗賊を放つてやつた。

その數日後、先日の三人打連れて本堂に參つて涙を流して犯した罪をわび、一心に念佛申して後上人の元に參り、乞うて出家し一向專修の行者になつたと云ふ。

**幡隨**—詳しくは幡隨意、範譽に投じて出家し、武州鶴谷寺、館林善導寺、京都知恩寺等に歴住し、後江戸下谷幡隨院を創す。元和九年寂す。

# 三來夜話

## 義人榊原亀三郎

増上寺法主　大島徹水

### 人だすけが縁となつて

今月は話題をかへて、明治年間に愛知縣で俠名をうたはれた榊原亀三郎親分のことを語つてみようと思ふ。——この人の前半生は所謂博徒渡世の泥沼に沈みこんでゐたもので、けつしてほめられたものではないのであるが、たゞその博奕打になつた動機が一風變つてゐる點や、後半生の懺悔生活の奇拔さの點で、大方の生活上に何らかの寄與をもつものとすれば仕合せだと考へるのである。

彼の生地は愛知縣知多郡成岩村。父親は慈心な佛教信者であつた。亀三郎の生立ちには格別のこともないのであるが、彼が十四五になつた頃、偶然のことから人名救助を行つた。それがどんな風の人助けであつたかは詳にしないが、兎に角その命を助けられた人はうれしさのあまり、言葉にいひあらはせないほどの感心を彼に示したので、まだ世間見ずの子供にすぎなかつた亀三郎ではあるが、人を救ふことが、どんなに愉しいものであるかを、つくづく噛み締め味ふとともに、一方、子供心にかういふことを思ひついたのであつた。

——今までは面白い遊びや、おいしいたべものが、世の中でいちばん樂しいものだと思つてゐたけれど、そんなことよりもつともつと自分の心を愉しませるものがあるのに氣がついた。それは人の難儀をたすけることなのだ。よし、自分の一生は、さう云ふ人々の面倒を見るために捧げよう。……

人の困つてゐるのをたすけること——この誰にとつても望ましい善行に、僅か十四五歳の亀三郎が思ひを走せたのは、まことに結構であつたが、然しその善行にはどうしても金錢の必要があると知ると、それを獲るための方法に對して、正當な理性を働かすには彼はあまりに單純な幼い頭腦しか持合せてゐなか

つた。子供はやりたいと思ひ立つたら直ちに實行に移さずに置かない純な一本氣の心をもつてゐる。子供のとき頭に一度燒きつけられた深い印象は、墓場に行くまで忘れられないものだと云ふ。そしてあらゆる子供は英雄崇拜家である。が、一人の子供にとつて豐太閤が英雄であるならば、或子供にとつては國定忠治が英雄であることも忘れてはならない。龜三郎の明治初めの時代、環境から浮びあがつて來た英雄は博徒渡世の俠客だつた。

## 目ざめたこゝろ

一度心にきめこんだら、あとへ引かぬ性分であつた。彼は博奕打の群に身を投じると、數年ならずして一廉の若親分にまつりあげられた。そして金が儲かれば貧民に施す、人助けをする、けつして自分の贅澤のために浪費しない。これが評判となつて乾分も次第にその數を增し、その地方では誰知らぬ者もないやうになつて行つた。

しかし、人を助けたいと云ふ動機はどんなに立派なものであつたらうとも、博徒の群は聖代において自らゆるさるべきものでない。龜三郎はひそかに土地を變へて流轉して行く身になつたのである。さうしてつひに移り渡つて行つたところは北海道であつた。

博徒の群に入つて三十有餘年。旅烏の身分ではあつたが、その頃の龜三郎は大勢の乾分から妾まで從へた大親分になつてゐた。けれども、その頃になつて、だんだん彼の心は暗いものに包まれて來たのであつた。つまり彼の疑心は、自分の長い間踏んで來た道が、果して正當なものであつたかどうか、と云ふことなのだつた。「若いときから自分は自分の遣方で善事を行つて來たのだが、なぜかそのたのしみも今となつては薄らいで來た氣がする。これはどうした譯なのだらうか？」幾度も考へあぐんだ末に、彼の胸にハツキリ分つ

最も進歩したし
純正頭腦藥

頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される樣にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と迄行かなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜映畫、觀劇後等で心神の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今ノーシンをのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から拔け出て來た樣に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉强、讀書、家事、裁縫等を續けることが出來る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

頭痛に
ノーシン

頭痛に一番
胃腸に無害

製造元　名古屋市東區京町
荒川長太郎合名會社

て來たものは、その自分の手段が全然間違つてゐたと云ふことだつた。

「さうだ、自分は自分の手で人助けをして來たと思つてゐたが、實はさうではなくて他人の金でそれをやつて來たのだ。これは自分の仕方がわるい。博徒の群に挾まつてゐながら、眞に人助けが出來やうはずがないではないか……」

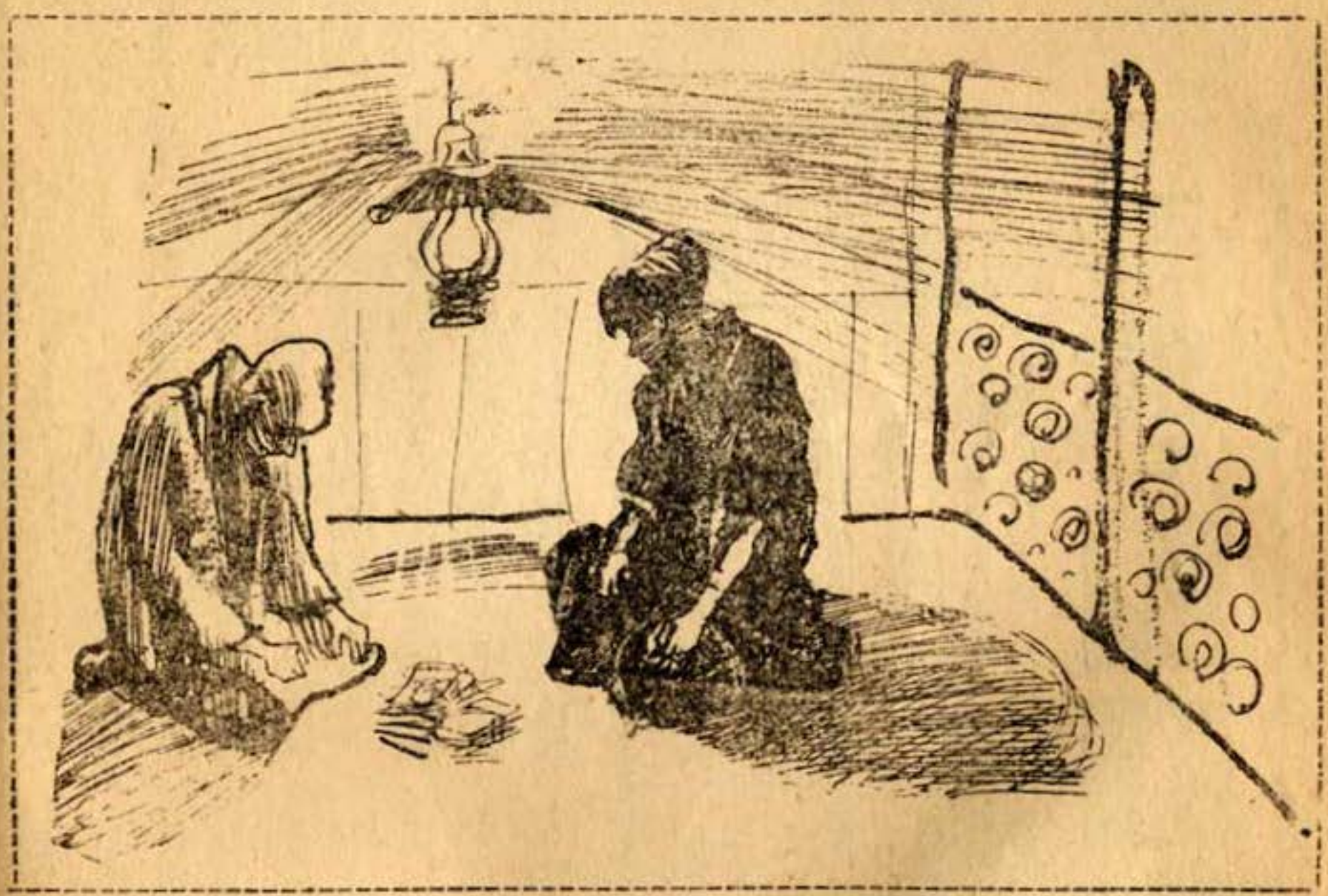
こゝで龜三郎の發心、懺悔の生活がはじまつたのである。

彼は多くの乾分達を集め、博奕打に縁切りの宣言を與へるとともに、身に隨ふもの一切と別れて、飄然、その地を去つて行つた。

人はどこにあらうとつねに忘れ得ないものは故郷の土である。彼の贖罪行脚の辿つてゆく路も、故郷への道となつてゐた。そして自身は字義通りに飢ゑを凌ぐだけの滿足をもつて、行きずりに出會ふあはれな人々をいたわりながら歩みを進めて行つた。身に何一つもたぬ今の彼に爲しうるすべては、腰物利用で人助けをすることだつた。

——街道筋の掃除をしながら捨てられた草鞋やボロ屑を丹念に拾ひあつめ、それで寸莎を作つて左官に賣り、得た金を貧民に施すといつた風であつた。

そこには今までの手下達に取卷かれて豪奢を誇つた大親分の面影はすつかり消えてゐた。在るものは儼として犯しがたい無私濟世のひとすじだつた。



## 社會事業は斯うありたい

かうして龜三郎は故郷の成岩に戻つて來た。彼は生家に落着くと、直ちに家をあはれな人々のために開放し、別に働く者のために仕事場を增設して、今日の所謂社會事業の一端をひらいたのである。

私が彼と往來したのは丁度日露戰役

のころで、彼は五十二三になつてゐたと記憶する。まだ壯者を凌ぐ元氣で、熱心に事務萬端の世話をやいてゐた。最初、私は彼の指南する劍術道場（彼は免許の腕前をもつてゐた）に佛をまつることについて、それを守る僧の世話依頼の件で彼を訪れたのであるが、彼の地所内の建物内が極めて粗末ながら、すべてに亘つて整頓し盡されてゐるのに一驚を喫したわけである。今日ほどの文明の利器の揃はぬ時代にあつて、あれだけの秩序ある事業をなしてゐたことは、ひとへに主人龜三郎の眞摯な心がけと圓滿な人德の致すところであつたらうと思ふ。一例を擧げると、働けぬ人々を收容する棟の中では、病人、老人、白痴等の室が細々と分けられてその間を主人と一如になつて働く三十餘人の使用人達が、實に拂いところまで手の屆く奉仕振りを示してゐたのであつた。

私が感激のあまり主人龜三郎に、

「實に僧侶も及ばぬ善行の永くつづくことを祈ります。」と云ふと、

「若いときから馬鹿ばかりやつて來たことの罪ほろぼしに過ぎません。たゞ、自分の因緣ある者に佛さまを拜ませたいと思つてゐまです。」

彼は謙遜した答へをするだけであつた。そして一方、戰役中一日として彼が心にかけぬことのなかつた戰地慰問のかずかずに對する各將官の感謝狀のぎつしり詰まつてゐる箱を私に示して、

「戰爭に從事出來ない自分の、せめてものお國への奉公です。」と呟いて、彼は感慨深さうな面をあげた。……

現在、ここの劍術道場に安置されてゐる佛は、收容の人々をはじめ村の青年達に至るまで必ず朝夕の禮拜の對象となつてゐる。すなはち人間の修養は信仰を基礎としなければならないと云ふこと、——このことを深く人々に教へこんだ主人の着眼の高さを今更のやうに感ぜずにゐられないのである。

*

すべての社會事業、社會教化は結局人である。今日の僧俗間に行はれるそれが、やゝもすれば名はかりの形式主義に墮してゐるのはなぜであらうか。つまり文明がすゝんでいろいろの設備が整つて來ると、自分の手で、自分の骨折りで、事に當るといふ、いちばん大切な心掛が歪んでしまふからなのである。昔の高僧はどんなに些細のことにまでもすべて自分の手で當つてゐる。ほんたうに社會を教化するなら、他を賴んだり、美名をもとめたりすることは無用有害のはずである。私がこゝに述べた榊原龜三郎は俗間にありながら、よくさうした點を誤たず、人の世のために盡した奇特な人であつた。

彼が發心して最初に行ふた廢物利用で人助けをしたことなど、社會教化の最も手近かな、よき具體的の例として、世の人々の反省を促したいと思ふ。

**世醫の治療する所は差ゆと雖も遲つて復生ず、如來の治したまふ所は畢竟じて復發らず。**

# 修業第一

中村吉右衞門

私はいさゝか弓をやります。この數年間やつてをりますが、自分では、これによつて可成り得るところがあつた樣に考へます。

と云ひますのは、結局する處、これも一つの道でありまして、單に肉體の練磨、精神の修養と云ふ以外に、私の役者として修業、藝道と云ふことゝ大變共通したところのあるのを感ずるからであります。

役者は一生の修業でありまして、藝を磨くためには日常不斷の稽古が一番大切であります。舞臺の藝術を磨くためには芝居の稽古が大切であるのは云ふまでもありませぬが日常の稽古事は更に一層大切であります。これは舞臺の上で實が確り出來てゐるかどうかゞ最後を決定するものであると考へます。

弓も俗に『卷藁三年』と云つて、初めから的に向はせないで、先づ卷藁で稽古させる程稽古を大切にしたものです。的を射るやうになると弓を取つて、あしぶみ、どうずり、う

## 海外通信

### 新手の密輸入

最近和蘭の國境に近いローテンバツハの農夫達が、鶏を密輸入した廉で五ケ月の徴役に處せられた。

それは國境の兩側に土地を持つてゐる農夫達が、獨逸よりも餌の安い和蘭で彼等の鶏を育てゝから、和蘭よりも玉子の高い獨逸で玉子を生ませやうと云ふ妙案を考へついたからである。

兩國の長所（？）を利用したこの巧妙な密輸入は遂々稅關吏に發見されて仕舞つた。然し當局の調査によると、それ迄に既にこの方法で二百萬個の玉子が密輸入されてゐたそうである。

### やゝこしい入籍

米國ニユージヤージー、ガストニアに住んでゐるスペーク夫妻の

ちおこし、ひきとり、かい、はなれ、かう云ふ順序に確り固めておきまして、さてはなれへ來て矢は放たれる。此處へ來ればもう唯我獨尊の境地です。そこまで確めて來たものゝ成果がこゝに集中し、此處に現はれて來る譯であります。

芝居にしてもこれと同じやうなことが云はれるかと思ひます。役者が揚幕から一歩踏出したら、もう矢が弓を離れたのと同じであつて、稽古も何もありません。日常不斷の心掛けがこゝに現はれて來るのでありますから、大膽に充分な餘裕を持つてやれなければ的を外れた弓と同じやうなものです。ですから、役者も舞臺へ出る前後の用意が最も大切なのでありまして。幕のあく前に仲々氣を許して洒落や冗談なぞを云つてはおられない、弓で云へばはなれへ來るまでの心の構へと同じであります。

矢が的に當らなかつたからと云つて、的ばかり覘つてゐたのでは駄目なのです。弓は的へ當てやうとしてはいけない。自分の缺陷は先きに述べたやうに切つてはなす迄の一つながりの基本的な姿勢にあるのですから、それを直すと云ふことに氣が付かなくてはならない、つまり普段の稽古の要點はそこになければならない譯であります。唯的に當りさへすれば良いと云ふ考へは邪道であつて、これでは本當の上達は望めないし、道に達することは出來ません。

役者も賞められやう、受けさせやうとばかりあせるのは、結局的ばかり覘つて何時もはずれてゐる弓のやうなものではないかと思ひます。

結局、弓にしても唯的を覘ふのではない、確りした稽古を積んでそれだけの心構へを造つて置くと云ふことによつて始めて本當に的に當てることが出來ると私は考へてをるのであります。

---

間に一つの問題が持上つた。と云ふのは今度夫のスペーク君の祖父さんがスペーク夫人のお母さんと結婚した爲めに、スペーク夫人は自分の御亭主の叔母さんになつて仕舞つた譯である。そして御亭主のスペーク君は自分の子供を自分の從弟にし、自分を自分の叔父にしてゐるそうだ。

**猫にも喪章**

歐洲の或る處では、喪章は戸口に掛けられるばかりでなく、蜜蜂の巣にも、秣室にも、豚小屋にも納屋にも、死んだ者の所有してゐた凡てのものに掛けられる。飼猫でさへ首に喪章を卷いて吊意を表するのである。

**捨子**

合衆國では捨子は大して珍らしいことではない。親や親籍のものゝ手で嬰兒や幼兒が街で捨てられたり孤兒院に引渡されたりするのが平均十五分間に一人の割合だそうだ。

# 鮨屋の彌助

子母澤寛作
鈴木金平畫

# 一

藏前藥師の御緣日。黃昏れて、春の朧ろ月が出た。鮨屋の彌助は、お通夜へ行くと友達をだまして借りて來た東棧の素袷のふところから、財布を半分はみ出させて、さツきから、すねぶん此邊をうろ〳〵してゐる。色の淺黑い苦味走つたいゝ男であつた。

「この御緣日にやア巾着切ア來ねえのかな」

ふと、そんな事をつぶやいた途端に、思ひがけなくどーんと、誰やらが突當つた。

「氣をつけろい」

ひよいと見ると、女袷の赤い袖裏を見せて、尻ツきれの冷飯草履、薄汚なく月代を延ばした片眼の奴が、その風態に似合はず、隼のように身を飜して、人混みを縫つて、毬をころがしたように、すつ飛んで行つた。

彌助は、すぐに、懷中を見た。

「うめえツ！　遂々、掏られた――」

淚が、ごく〳〵と胸ン中へこみ上げる程にうれしくて、思はず、その後を追つて行く。

御緣日の雜沓を抜けると、街々には、春らしい夕靄が地を這つて、もう灯の入つた家も見える。

片眼は、一度、うしろを振返つたが、追はれてゐるとでも思つたのか、それから先きは、こつちの露路、あつちの拔け裏と逃げ廻つて、もう大丈夫とほツと息をついた時は、もう大川もすつかり暮れて、おぼろ月が、自分の立つてゐる影を兩國橋の橋板に、ぼんやりと映してゐた。

その晚、相生町四丁目旗本の本多主水の屋敷裏に住んでゐる巾着切の親分四丁目の德次郎、仲間では四丁目德の親分といふでつぷりとした貫祿のついた人の家で、十二三人も集つた子分の獲物を調べてゐた。

行燈を引寄せて、親分の前で、一家の束をする兄哥株の奴が、一人一人の値踏をしてはいくらかづゝの錢をやつた。紙入、煙草入、女の髮かざり。ひどいのは刀から脇差迄あつた。

「さ、お前のア何んだ」

見やつた先きに、藏前へ出張つてゐたあの片眼ツかちが、窮屈そうに膝ツ小坊師を揃へて座つてゐた。

「へえ。あツしのア、これなんですがね」

つツと、疊の上へ突出したのは、さツきの彌助の財布、

「中味アあるのか」
「へえ、勘定もして見ませんが、小粒が十ばかりへえつて居りやす」
「ふツふツ、いゝ仕事ぢやアねえか」
「へえ」
「お前にしちやア上出來だな」
兄哥分のそう云ふのを、四丁目徳もにやりとして
「お前に引ツかかるようぢやア田舎もンか」
といつた。
「ところが」
と眼ツかち少し得意そうに
「東桟の素袷に、剃毛ツ先きをちよツぴりでも曲げてゐようといふちやきちやきの奴で」
「不思議だな」
「へえ——まア、とにかく御覽なすつて」
「うむ」
兄哥が手にとつて、調べると、如何にも中味は小粒がきツちりと十個。それから、薄墨で書いたような文が一通入つてゐた。
「何んだこれア」
と兄哥。
「文ぢやアござんせんかね」
と眼ツかち——。二人とも字がよめないのであらう。親分は
「どれ、見せろ」
と引きとつて、
「ふーむ」
讀みかけて小首をふつた。
「眼ツかち、大變な稼ぎをしやがつたな」
「へ？。な、な何んですかね親分、それア」
「ふツふツ。てめえが、こんな稼ぎをするのアどうもおかしいと思つたんだ。これアお前。わさと掴られて歩るいてゐたんだぜ」
「え？」
「こ奴ア、俺たちの仲間へ入りてえ奴なんだ。その金ア、實はひど工面をしたんですが仲間の兄イ方への顔つなぎにしてくんなと、こう云ふんだ」
「へ、へーえ。こ、こ、これア驚ろいた」
四丁目徳は
「いゝか、この文にはこう書いてある——わたしは鮨の職人ですが、思ふような鮨を作るについて、どうしても金のいる

事がござります。そして、その金の入目がいつになつたらつぐなへるかわからないので、お仲間へ入れてもらつて、一日の中半分はその方をやり、半分は、自分の思ふ通りの鮨をこしらへたいのでござります。親分さん、どうか、お仲間に入れて下さい——とこう云ふんだ。變つた野郎だ。だから——この文を親分さんに屆けていたゞくためにどなたかにわざと掏られます、掏つた方はわたしを可哀そうだと思つて、どうぞこのふみだけでも親分さんへお見せ下さいと書いてある」

兄哥分の奴が、横から、そツとその文を覗いた。名前の下に、べつとりと、生新しい血判があつた。

「あツ！　血！」

「しッ」

親分は、そう云つて、その文を卷くと、默つて、ふところへ入れて終つた。

「眼ツかち、その小粒ア皆んなお前にやる」

「へ？　ほ、ほ、本當ですかえ？」

「嘘と思ふなら受取るな」

## 二

彌助は、柳橋の川岸ツぷちに鮨の屋臺を張つてゐた。月でもあり、まして、晝よりは夜のこの界隈。殊にはめつきり夏の近づいたのを知らせる暖かさで、柳のみどりが、そよ〳〵と匂ふようであつた。

掛行燈の灯に、ぼんやりと浮んだような彌助の眼。今宵はぢり〴〵と、何にかを待ちこがれてゐるように、不思議な底光り持つてゐた。

そのすぐ隣りには、夏になると涼みの客へ麥湯や冷めたい白玉を賣るのだが、この頃はまだ飴湯だけを賣つてゐる勘助爺が、水色の小旗を晝のまゝに下げて、時々、退屈そうに、彌助の方へ話しかけた。

「彌ツさん、一寸、暇なようだね」

「うむ、いゝ鹽梅だ。さつきのお客が、鰶を十に、小鰺を十やつて行つてくれたが、おつそろしく急がしいお客で、俺も少々、汗が出たよ」

「そうかえ。お前さんの鮨もこの節アどうやら江戸の通人にはわかつて來たんだね。江戸の人が、お前さんの鮨でなくちや喰はねえといふようになるのも、そう遠くアねえだらうね」

彌助は、横の暖簾をかきわけて、顔を出した。

「有難うよ、とつさん——俺アね、俺のこの鮨が賣れて、錢を儲けてえといふんぢやアねえんだ。鮨といふものは、こう云ふもんだ、これが本當の江戸の鮨だと、それでなくちやア人が承知をしねえようになれアそれでいゝんだよ。俺も餓飢の時分からの鮨職人、せめて、これが彌助の鮨と云ふんだと、後世代々の鮨職人に、この腕と名を殘してえのだよ」

「そうだらう、わかつてゐるよ」

と、勘助爺は、もう、眼をぱち〳〵して、

「お前が、元を切るどころか、借金を質に置いて、うめえ本當の鮨といふものを、江戸の人間に喰はせてえと、ひどい御難の工面をして種を仕入れてゐるのは、この、おやぢだつて知つてゐるよ。お前こそ、本當に職人らしい職人だよ。いゝ物をこしれえてえのア誰も同じだ。が、そんな奴ア必らずうんと客を呼んで高く賣つて錢を儲けてえといふ事がつくもんだ、それをお前は、たゞ、自分で氣のすむものを拵へれア損をしたつて、いゝんだ、これでも俺の心の滿足な鮨ぢやアねえ、味ぢやアねえと、そうしてやつてゐるのを見ると、俺アいつも涙が出るんだよ」

「有難ふよ、とつさん——今んところ、俺のこの氣持がわかつてくれるのアお前さんと、お玉の奴の二人きりだ。尤も、

今夜つから都合によつちやア」
と云つて、彌助は口の中で、
「もう一人、殖へるかも知れねえが」
と低く云つた。
「うむ、うむ」
と勘助爺は、うなづいた。遂々、涙がぽたり〳〵と頬を傳つた。
「お玉さんと云へば、あの人もこの世には珍らしい貞女だなア。お前さんの名が後の世に殘る程のうめえ鮨の出來る迄は、自分から進んで、身を賣つて、錢を貰いでゐなさるんだ。え、彌助さん、きつとお前の名が殘ると一緒に、お玉さんの名も殘るよ」
「と、と、とつさん、有難ふよ。たつた一人でもそう云つて呉れる人があれア、彌助もお玉も、このまゝ死んでも口惜しくはねえようなもんだよ」
勘助爺は、暫く默つてゐたが、俄かに、
「わつはつはつはつ」
と笑ひ出した。
「忌やに話が滅入りやがつたよ」
この時、二人の前をすりぬけるようにして、通りかゝつた二人づれ。思ひついたか
「御免よツ」
ぬつと、彌助の屋臺へ入つて來た。
二人とも、何處から見ても、堅氣の旦那ではなかつた。それも道理、一人は四丁目德の親分、一人は、四丁目德一家の束ねをする兄哥。
德は
「そつちの氣に入つたものをつけてくれろ」
「へえ」
彌助は、そう云ひながら、いきなり、さつと小鰭を握つて出した。靑い澄んだような小鰭の色。
四丁目德は、鮨よりはぢいと彌助の顏を見詰めながら、その鮨を口へ運んだ。彌助の眼は、まるで燃えるように眞劍であつた。
「うめえ」
思はずそう云つて
「いゝ酢加減だなア——鯵を一つ」
「へえ、鯵はちつと早うございますが、餘り、脂のかゝらねえところがまたよろしいかも知れません」
小鰭も鯵も、一つづけで、生きてゐるようであつた。

「うめえ」

親分も兄哥も、夢中で喰べた。二人とも、今夜わざ〳〵此屋臺へ出て來た氣持も忘れたように、たゞ、その鮨のうまさと、江戸派さに心を奪はれてゐた。

入江町か石町か、時の鐘が、春の夜らしくしんみりと響いた。

四丁目徳は

「あい、兄イ、代はいくらだね」

「へえ、一つ、八文でございます」

「え？　これが一つたつた八文？」

「へえ」

四丁目徳は、默つて彌助の顏を見た。そして、心の内で、自分一人で幾度も幾度もうなづきながら、

「彌助さん、一寸、顏を貸してくれ、俺ア、お前さんの財布の中の文を見た相生町四丁目の徳次郎といふもんだ」

「え？」

「兄世番は、こ奴にさせて置けアいゝさ。何アに、一寸でいんだよ」

それから少しして、二人は、兩國橋の眞ン中に立つてゐた。川水の匂がぷーんとして、その川面に、月と星が、落ちかゝるようであつた。

彌助は泣いてゐた。

「御承知の通り江戸の鮨は、鮪、海老おぼろ、小鯛、玉子燒これが主でございますが、鮪もその身を薄く切りまるで紙のようにしてつけるが職人の腕。海老おぼろにも玉子にも泥ぜ物をし、小鯛なども二つに切り、まるで皮を喰はせるようにする。それが今の江戸の鮨、そうするのが職人の腕となつてゐる。これで二十文から三十文もとるんだ。何アに本當は鮨なんさどうでもいいんだ。たゞ、鮨を拵へるのは、錢を儲ける手段の一つにすぎねえ、そんな奴は默つて錢をくれる人があつたらきつと鮨はにぎるめえ、それが、その心が殘念なのでござります。あつしやア本當の鮨を拵れえてえ、鮪でも四分から上の厚さに切つてつけ、本當に魚の味と飯の味と酢の味と、鹽の味とを一つにして舌の上に極樂を作つて上げてえのです。

食べものに向ふ時ア人の氣持の奥底が飾りつけなく出るもんだ、そ奴へ得心の行くうまさを上げてえ、たゞこれだけなんです。だが、それをやるにしちやア、あたしのようなしがねえ職人では到底も錢がつゞかねえ、お恥しい話ですが、實ア女房を品川へ女郎に賣つてこの錢が一文なしになつた時、

はじめて、この鰺と小鰺が、人様にほめられるようになつて來た、これ迄、御承知の通り、こんな小魚ア江戸の鮨にはなかつた、いや、無えといふよりは、これをこうしてうまく鮨にして喰べさせる腕もなかつたし、職人に工夫も、いやそれよりも眞心がなかつたのです。あたしは、今、親分にほめていたゞいた、だが、あれアあたしぢやアない女房の血と涙があの鮨にあふれてゐるんです。あたしは、いゝ鮨を拵えてえ江戸の彌助のこの鮨が、末代まで江戸鮨の型になつて、これから後、どんな職人が出て來ても、この、彌助の握つた鮨より一と足も上へは出れねえ、味も、使つたさかなもこの彌助の眞似に過ぎねえ、そう云ふ鮨が作れたら、あたしは、例へどんな事になつてもいゝ、磔死になつても獄門になつても、——」

「うむ？」

「親分、あたしが——この彌助の鮨が、江戸中に廣まる迄アどんな事アあつても遣り遂げてえのです。どうか、お身内にしてやつておくンなせえ。あたしは、稼いた錢を、道樂やばくちにするんぢやアねえ。みんな、うめえ鮨、いゝ鮨、この彌助鮨を作る資本にするんです」

「だが——」

「こんな御法度の裏を行く渡世よりは外の地道な事を——とおつしやるのでせう。そ奴アいけねえ、他の渡世で儲けた錢位の端た金で、江戸の鮨の萬代不易の型アつくれるものぢやアありません」

ふと見ると、おぼろな月が、大きな輪を着てゐる。

## 三

彌助の鮨は、江戸中へ、まるで野火のように燃え擴がつて行つた。これ迄紙のようにうすい鮨をつけた兒世も、みんな三分から五分位の肴にしなくては、お客が誰も喰べてはくれなくなつて終つた。玉子、海苔巻、海老おぼろ、白魚、蝦、それ位に定まつてゐたところへいろンな小魚が鮨の肴になつたし、あなご、海老の丸づけ、平目、大鯛、赤貝、その他、いろんな肴が、悉く、鮨に利用され、またその作り方が、これ迄、味ひ得なかつたうまさであつた。

江戸つ兒は、湯屋のかへり、お八つの煙、贈り物、彌助の型の鮨でなければならないようになつた。

が、彌助は、依然として、柳橋の屋臺に、原價を切つて拵へるうまい鮨をにぎつて暮してゐた。

また春のおぼろ夜であつた。

四丁目の子分が、ころがるようにこの屋敷へ飛込んで來た。

「おう！　いケねえ彌つちやん、手が廻つたッ！」

「え？」

「親分が、そ云つた。今夜の中に、五里と十里、ふッ飛んでくれとよ」

だが——。

彌助は、もう、自分が、そんなに悪い事をしてゐるような氣持にはなれなくなつてゐた。

「俺ア他人様のものア掏つてはゐるが、その錢アてめえの爲めに一文だつて使つてやしねんだ。みんな、この彌助の鮨になつて、天下の人々のロン中へ戻つて行つてゐるんだ。彌助は他人様にばかり物を無くさせちやアゐねえ、自分でも、お玉といふたつた一人の可愛い女房を女郎にしてゐるんだ。俺ア彌助鮨のためにすつた、俺ア江戸ッ兒の本當にたんのうするうめえ鮨を拵れえるために掏つたんだ。俺ア並の巾着切ぢやアねえ、俺ア並の惡黨ぢやねえ」

そんな心は、彌助をすぐに高飛びさせなかつた。

遂に、捕へられて終つた。

彌助の掏つたものゝ中に、將軍家拜領の品があつて、それを賣る譯にも行かず泥溝へ棄てたといふ事から、巾着切には前例がなく、彌助は、引廻しの上、磔死と刑が定まつた。

秋の末であつた。きのふも今日も少し風が吹いて、はらはらと、何處からともなく朽ち葉が散つて來る。

彌助は、その冷めたい秋風の中を、痩馬で江戸を引廻されてゐた。

何處へ行つても、鮨屋があつた。そして、その見世先きの盤臺には、まるで、彌助のこれ迄の功績を語るように、いま脂がのり切つてうまい最中の、鯛だの、鰺だの、縮緬肉の鮨だのが、思ひ切つて、分厚に切つてつけられた本當の江戸らしい、いや彌助の型をそのまゝ行つた鮨が、立派に並んでゐるのが眼についた。

馬の轡をひいてゐる下人が、そつと、彌助へいつた。

「四丁目の親分が、江戸中の鮨屋へ手を廻して、その家の自慢の鮨を並べさせ心ばかりお前さんの見送りをしてゐるんですよ」

彌助は、たゞ、輕くうなづいた。

「殘つた、本當に、この俺の鮨が殘つた。俺がこうして磔死になつても彌助の鮨は、もう、何時迄も、江戸からは消えない。俺は江戸の人へ、本當にうまい鮨を殘したのだ」

彌助は涙が出て、涙が溢れて堪らなかつた。しかし、その涙は、悲しい涙ではなく、心の内は、春風の吹くしづかなる極樂淨土であつた。

馬は鈴が森へ——。

品川にゐた女房のお玉が、自分の家の女たちへ、彌助の鮨の大盤振舞ひをして、

「うまい〳〵」

と、何んにも知らず笑ひさゞめく人達の間から、そつと姿を消して海へ身を沈めて死んだのは、彌助、所刑の次の日であつた。

この日も、また、少し風が吹いて、木の葉が、はら〳〵と散つてゐた。

——終——

## あけて惜しい玉手箱

浦島太郎さんが、乙姫樣からお土產に頂いた玉手箱を開いた處が、忽ち白煙が上つて見る〳〵よぼ〳〵のお爺さんになつて仕舞つた顚末は皆さんとつくに御存知の話ですが、それから先きのことを知つてる人は少ないでしよう。

浦島さんはその時、あまりのことにびつくりして仕舞つたのです。自分がたつた三年だと思つてゐたのが實際は百年にもなると云ふのですから、誰れだつて驚くのは當り前です。

なんだつて乙姫樣はそんなお土產をよこしたんでせう。が、中からバッと白煙りだけで、その外になんにも殘つてゐなかつたと云ふのは嘘なのです。

浦島さんは狼てゝ玉手箱を逆さまに振つて見たのです。若返りの藥が入つてゐるかも知れないと思つたのかどうかは解りませんが、そうやつて見るのは浦島さんに限らず、人情と云ふものですにも出て來ないのです。殘して、今度は箱の底をのぞいて見たのです。そして見たのです。浦島さんは何を見たのでせう。その箱の底にかう云ふ字が書いてあるのを見たのです。

### 夢中の百年は一年に等し

そこで、乙姫樣のお土產が案外慘酷なものでないと云ふことが解つたのです。

皆さんそうじやありませんか。歡樂を追ふてその日〳〵をうかうか暮してゐては月日の立つのも早いでせうし、人間も空つぽになるのは當然でせう。一刻一日を深く味つてこそ、生きた甲斐があると云ふものです。

浦島さんにこれが解つたでせうか。

# 大衆歌壇

## 與謝野晶子選

○ 大阪 小山 文二

灰沢し崩れて落つるものながらいみじき香のさまに靡ゆる

○ 群馬 瀧澤 春野

苦しみと惱みの中にわが申す南無歸依佛と人は知らじな

ありがたき御名を唱へてわが母を朝夕まつる日となりしかな

○ 廣島 上原 抱地

何事もみだの教へにしたがひてみ法の道にわれ進ましまし

野の寒く日はかげれども空の色暮れやらずして春の香ぞ立つ

○ 岩手 藤原貞二郎

わが垣の去年の蔓にも一時はとまりてありぬ春の淡雪

生れ出て幾日ならぬにまたもとの無に歸れるか悲しきわが兒

○ 北海道 花田 順往

み佛のおんふところに抱かれて笑みつつあらん逝ける幼な兒

憂きことは身を去らずして月日立ち老の境へ入りにけるかな

○ 埼玉 青野 智惠

身のはてと思へばかなし爲す事も今ぞ甲斐のなき老の世としる

虹の露はきて秘かに痛手をもいみじき珠となす貝のあり

○ 廣島 川田 信嶽

立ちのぼる香のけむりの一すぢにたゞ直ぐなるを心とはせん

二十年を山のみ寺にこもり居て親見まつらず牡丹開けど

○ 滋賀 本間 秀道

いつしかと雪に變りぬ夜の窓の葉隱を分くる風止みて後

○ 靜岡 一向 山人

煙草吸ひ諸行無常のことわりを煙の末にゆくりなく見る

○ 小倉市 益田 慧光

筑紫野の寒き春かな胡地の風しばしば雪を送る三月

○ 山形 北野 松春

積む雪の下にも崩ゆる草ありておとづれにけり北國の春

○ 東京 三刀屋和人

雪の夜に灯かげを投ぐるかの窓の內なる人のなつかしきかな

○ 滋賀 佐々木白鷺

春日さし雪解の水の溢れ行く川のほとりの蕗の薹かな

○ 土佐 山元 南湖

み佛をたのみまつれる喜びの身に溢れつつ申す唱名

○ 香川 横江 史枝

子らのためたゞよき母とならんとす世渡る才も富もねがはず

○ 山口 竹原 明惠

朝霧に船は見えねど入海に櫓の音のしてあくるしののめ

○ 岡 靜代

手づくりの餅を供へてまつるなり亡き人しのぶ春の彼岸會

○ 姫路 內海 一音

病む母の消息をかく妹は疲れしならん手の亂れたり

○ 青森 土岐 學信

三年經て家に歸れば母上の髪に白增し悲しかりけり

○ 三重 大野 步行

古き日の友の便りを見るごとに我れの弱さを一人悲しむ

---

本欄への投稿は官製はがきに一回一人三首以內とする。

文字は改書で明瞭に、表に「應募短歌」と朱書すること、

# 女人禁制の國
# アトスの僧侶達
## 中村一

千數百年の間唯一人の女も足を踏み入れなかつた國が未だにあるなぞとは一寸信じ兼ねる。だが、かう云ふ國が歐羅巴の、しかも維納から卅六時間で行けるところにあるのだ。僧侶の共和國——マウント、アトスがそれだ。

大概の人はマウント、アトスとは頂上に僧院のある山だ位に考へてゐるが、事實は長さ卅五哩もある半島全體を云ふので、そこに僧侶ばかりの村落が散在してゐて、その中の二三は小さな町位の大きさがある。全部で約五千人の僧侶と二千から三千の徒弟、農民がこの半島で生活してゐる。全く僧侶ばかりの世界で、千年前の昔と少しも變らずに生活してゐる。ビザンチン帝國の遺物だ。

この國に一度足を踏み入れたら、突然中世期の物語り中に抛込まれたやうなものだ。上陸第一歩で、先づ僧兵の歡迎を受ける。それが、黄色い天鵞絨の股引、白い毛の靴下、黒いリボン付きの木靴、ぶく〳〵な白い上着、鳥頭鷲の徽章つきの帽子——何處から見ても中世期の兵隊さんだが、これが聖地の軍隊なのだ。

アトスには車の付いた乘物は一つもない。道と云つても自然に踏みならした山道見たいなものだ。だから山の向ふ側にある主都カリエスに行くには此處で騾馬を雇つて、手形を貰つて置かなければならない。

カリエスの町は神秘的な中世紀の雰圍氣に

## 寓話集

### 社會のお陰

孟子の頃、神農學を奉ずる者に、許行といふ人があつた。その徒は何れも粗末な毛織の布をまとひ、履を作り、莚を織つて、それを生業として「眞の賢君は民と共に耕作し、自ら炊いて食ひ乍ら民を治めるものである。民から年貢などをとりたてるのは、民を惱して、自分を養ふので、甚だ宜しくない。眞の賢君の所作ではない」と云つてゐた。その徒の一人陳相と云ふ人が孟子の許へ來て　その話をした。

孟子は「許子は穀物は自分で作るか」と問うてみた。

陳相は「はい、自分で作ります。」と答へた。

「衣服は自分で織つて着るか」

充ちた狭い曲りくねつた町だ。色々な品物を賣つてゐる小さな店が軒を並べてゐるが、いづれも僧侶の手で經營されてゐる。カリエスでのモダン施設は銀行と電信局だけだ。二軒の茶店と一軒の宿屋があるが電燈はない。

大通りのはずれに教會があるが、カリエス最古のもので第十世紀頃に建てられたものだらうと云はれてゐる。

この半島は事實上獨立してゐる。僧侶達は租稅も拂はぬし、輸入したものに關稅も拂はぬ。ギリシヤ政府は彼等の內政には一切干渉しない。

實行されてゐる唯一の規則と云ふのは、アトスで僧侶になつた外國人は自動的にギリシヤ國民になると云ふだけのものである。ほんの僅かな警察力もあるが、それも僧侶の支配下にある。

アトスの僧侶の大部分は老人で、近頃では若い者が僧侶にならなくなつたと云つてひどくこぼしてゐるが、それでも未だ多少の青年僧がゐて、多くは十四五の少年である。彼等は普通老僧が仲間を求めて親戚から連れて來たものである。老僧は少年にアトスは素晴しい所だと云ひ聞かせ、少年とその兩親を說き付けて仕舞ふと、自分の精神上の息子として育て上げる。少年は老僧と同居するが彼が死ぬとその財產を相續する。少年達は世間知らずの間に連れて來られる。だからこの聖地が彼等の唯一の天地であつて、自ら天職として撰んで來た譯ではいが、極めて幸福らしくさない。

僧侶の中にたものも幾心情からこるが、大部生活だからひない。

僧侶は全は無敎育なシヤ正敎は智識は魂の幸福にとつては極め

「はい、毛織を着てをります」

「その絹は自分で織るか」

「穀物と交換します」

「何故自分で織らないのかしら」

「農の邪魔になりますから」

「物を煮るには鍋や釜を使ふだらう、田を耕すには鍬を使はぬかしら」

「勿論使ひます」

「それは自分で作るか」

「やはり穀物と交換します」

孟子は笑つて、

「許子は何故道具を作らうとしないのか一々穀物と交換するのは餘計な手數ぢやないか」

「さうは手がまはりません」と云ふと、孟子は愕然として、

「さうは手がまはらぬか、成程、さうは手がまはるまい。一人で何もかもすると云ふことは、人間には出來ることぢやない。是非他人を煩はさにやならぬ。と云つてそ

て有害なものだとし、心の禁欲は肉體の禁欲と同じ程度に實行すべきだと考へてゐるから。

が、週まにはこの聖地にも教養と智識のある僧侶がゐる。ヴアシリイ長老は帝政ロシアの前大臣で流暢な獨逸語を喋る。ジョージと云ふ長老は元技師で大戰當時は陸軍士官であつたと云ふが、これも獨逸語を喋ると云ふ具合でまだ二三人はこの種の人達がゐる。

數ある僧院から二人づゝ代表者だ出て、カリエスの町のコナキと呼ばれてゐる大きな家で暮してゐる。全部で廿人の代表者が宗教會議を組織して、會合するが、それは黒い煉瓦と石で出來てゐる十八世紀風な議事堂で、そこで聖地の種々な事柄を審議する。旅行者が僧院を訪問する紹介狀を得るのも此處である。僧院に着くと門番に先づ紹介狀を示す、と、客間に案内されて慣例のまるめろのジヤムを一匙、大ゴップに一杯の水、土耳古珈琲とラキと云ふ酒を一杯づゝおもてなしに預る。客人の寢る部屋はちやんと出來てゐる。僧院の設備は悪くないし、食ひ物は美味い。だがこゝへ來れば誰れでも禁欲生活を實行しなければならぬ。豆のスープ、トマトサラダ、オリーブ、パンと上等の酒が毎日の御料理だ。一つの僧院から他の僧院までの距離は騾馬に乘つて一時間から六時間位ひはかゝる。騾馬は僧侶が無料で貸して呉れる。何處へ行つても僧侶達はとても親切で人なつッこい。訪問者は必ず日沒までには僧院に入らないと閉出しを食はされて仕舞ふ。と云ふのは日沒には僧侶は全部戸を下して門をかけて仕舞ふからだ。マウント、アトスの時間はビザンチン時代のそれと同じで、十二時が日沒になるのだから、季節々々で違つて來ると云ふ譯だ。僧侶は馬鹿に早く寢てしまふ、と云ふのは夜中に起きて夜のお勤をやらなければならないからだ。日の出には本堂へ出て禮拜式を、客間に案内されて慣例のまるめろのジヤムを一匙、大ゴップに一杯の水、土耳古珈琲とラキと云ふ酒を一杯づゝおもてなしに預る。客人の寢る部屋はちやんと出來てゐる。僧院の設備は悪くないし、食ひ物は美味い。だがこゝへ來れば誰れでも禁欲生活を實行しなければならぬ。豆のスープ、トマトサラダ、オリーブ、パンと上等の酒が毎日の御料理だ。一つの僧院から他の僧院までの距離は騾馬に乘つて一時間から六時間位ひはかゝる。騾馬は僧侶が無料で貸して呉れる。何處へ行つても僧侶達はとても親切で人なつッこい。訪問者は必ず日沒までには僧院に入らないと閉出しを食はされて仕舞ふ。と云ふのは日沒には僧侶は全部戸を下して門をかけて仕舞ふからだ。マウント、アトスの時間はビザンチン時代のそれと同じで、十二時が日沒になるのだから、季節々々で違つて來ると云ふ譯だ。僧侶は馬鹿に早く寢てしまふ、と云ふのは夜中に起きて夜のお勤をやらなければならないからだ。日の出には本堂へ出て禮拜式をやる。晝食後、四時か三時頃まで一眠りやつてからまた晩拜式だ。或る祭日の前夜は徹夜祈禱をやる。

大きな祭日だけに撞く。各儀式は木板

## 道具に使はれる人

花嫁さん、駕籠に乘つて出かけると、駕籠が悪かつたか、花嫁さ

れは他人を憎ますことぢやない。それと同じく、君として民から年貢を取るには、民を憎ますのではない。一人の身で農業をしながら天下を治めることは出來ぬ。人を治めるものが、人に養はれ、人に治められるものが、人を養ふのに、何の不思議があるものか」と云つて陳相をいましめた

許行の理想は自ら織つて着、自ら耕して食ひ、自ら建て、住ひ、と云ふにあつた。けれどそれは出來得べくもない。ほんの空想にとゞまることは、許行自身の日常が、これを證明し、孟子もそれを指摘した。將して然らば人は社會のお蔭で三餐を得、この上に生存してゐるのである社會を離れて個人はない。

を木槌でたゝいて知らせる。

僧院には二種類あつて、「修道」と「學寮」と云ふ様な區別だ。前者は嚴格な規則があつて共産主義見たいな經營をやつてゐる。僧侶達は個々財産を持つことは許されないし、衣服さへ共通に分け會つてゐる。食事も食堂で一緒にし、終身選任された一人の僧正によつて統制されてゐる。

一方學寮式僧院は學校に似通つた處がある。各僧は寢室と書齋と豪所のついた部屋をあてがはれてゐる。普通年下僧が見習僧と部屋を一緒にしてゐて、年長者が死ぬと年下のものがその財産を受繼ぐ。學寮では個人財産が許されてゐるから。彼等は全く獨立した生活を營んでゐて、別々な部屋で別々な食物を作つてゐるが、大祭日だけ食堂で一緒に食事することになつてゐる。

アトスで最も興味ある地點は牛島の西部だ。そこは岩ばかりの荒地で、隱者の住ふ處なのだ。カロウリアと云ふ處では隱者が海に突出た巖窟の中で生活してゐる。その一人はロシア皇帝の從弟で、もう一人はペトルスブルグで有名な大學の教授だつた男だ。

カフリカリビヤは海に望む谷合の部落だが此處では僧侶達は皆んな藝術者だ。彫家とか木彫家とか。土地が農作に適しないので、彼は聖像を描いたり、木の十字架を彫つたりして、それを信心深い人々に賣つて生活を立つてゐる。

松浦一先生著　發行所　傳道院傳道會館

# 生きる力

明晳にして纖細なる著者が、眞に『生きる力』としての宗教を說々として說けるもの。近代人必讀の快著！

一部送料共　金二十錢
四六判七十一頁　美本

◇本誌讀者のため、便宜上、特にお取次致します。御入用の方は卷末に入れてある振替用紙で、直接本會宛お申込下さい。

んのお尻が重かつたのか、途中ですつぽり底が拔けた。

駕籠かき共は大いに困つて、

「花嫁さんに歩いて貰ふわけにはゆかず、と云つて駕籠をとりかへてくるには道が遠い。その附近には駕籠をかす家もない。さあ、どうしたものだらう。」

花嫁さんはそれを聞いて、

「お前がた、何も心配することはない。妾に妙案がある。この儘揃いで行つておくれ。妾は駕籠の中を歩いて行くから。」

駕籠には何のために乘るか、歩行の勞を助けるためである。底の拔けた駕籠の中を歩いた花嫁さんは安樂を得なかつたのみならず、駕籠が邪魔になり駕籠のために苦しめられたのであらう。これを稱して道具に使はれると云ふ。人は兎角道具や持物に使はれ、金に使はれ、年中肩を休まるひまはなく、命さへ棒にふる者もある。

# 春にちなむ句

## 荻原國三

手枕の樂を知れとや涅槃像　（木兒）

といふのがある。成程御涅槃の姿は手枕なされたやうな趣がある。芭蕉にも、亦同時代の人の句にも穿つた聞えた句がなくもないが此手枕の樂と見極めた尊さは有難い限りであらう。

次は身拭を詠んだ句がある。

梅檀の香は今日ばかり嶺峨の花　（白扇）

嶺峨天龍寺の佛殿を御身拭ひした今日は梅檀の薫りもするだろうし、丁度花の眞盛りの春好、是程の眺めはなからうといふ句意。誠に氣品ある句だ。春の雨の匠みを讀んだものに

開帳の錢よむ日なり春の雨　（素風）

何寺の出開帳といふものも春陽が一番の附け目である。日和さへ好くば參詣者の踵を接しゴッタ返すに、偶まの春雨で講元も落着いて、お賽錢の取纏め方、小錢錠錢までもの計算。雨は此場の取合せだが、夏にも秋にも又冬の雨にもそぐはぬ、矢張春の雨を最上とする。

龍好法師の徒然草の中に、飛鳥川の淵瀬常ならぬ世とて末の末迄捉するのは愚な事で、果敢無き沙汰と書かれてあるとは御存じであらう。が、玆に九輪草を詠んだ句に、徒然草以上に無常を手輕く云ひなしたのがある。

飛石に殘る伽藍や九輪草　（竹茂）

九輪草をもつて伽藍の跡を偲ばす。如何にも廢れた佛殿の莊嚴くちはてゝ草叢にあせた九輪草の咲きなせる邊、眞に兼好が文の妙に比べて見劣りはせぬ心地がする。夫に似寄てもう一つ

## 大衆俳壇

諏訪　久保田　穫

立春や雀も共によろこべり　○　山形　北野　杉春

寬からほろ〳〵零る長閑なり　○　讃岐島　吉野　法泉

早春や尾羽かひつへる籠の鳥　○　三重　西坂　早苗

藥ぞとみやけの苞や蕗の薹　○　諏訪　小松　貞夫

春寒し名殘をかたる細ともし　○　福島　佐藤　正弋

落椿あはれ墓への路ふさぐ　○　神奈川　天明福三郎

陽炎や雪まだのこる丘片方　○　千葉　大河内月如

春寒し波のゆき〳〵の音にさへ　○　下關　關野　公孫

寒かりし月のぬくみや海の上　○　北海道　竹岡　昇全

名は朽て塚に櫨も咲きにけり　（山　夕）

是も兼好が同じ筆になれる、人の亡き跡ばかり悲しきは無しといふ件に似て、塚に櫨のソット香にたつ哀れな様と見做さるゝ幽境の匠みがある、

○

昔時より田鼠化して鶉となると云ひ傳へてゐるが、今時其れを本氣にする者もあるまいが、夫を觀たものであらうが入楚といふ俳人がコンなことを詠んで居る。

嘴にまだ毛のみゆる鶉かな

鶉の嘴に鼠の毛なるものを見極めた作だと云ふが、變なものである。更に其角の句に鳥雲に入るを題材にして斯く詠じてゐる、

鳥雲に餌さし一人の行衛かな

昔時は腰に平たい大籠を結び付け、釣竿のやうな繼竿の尖端へ黐をつけ、口に雀の囀るに似た笛を鳴らしつゝ身装凛々敷、小鳥を捕て居つたものだ。之を餌差とも鳥差とも稱へた。サテ鳥雲に入るとは小鳥も陽氣に連れて遠く飛去ると、餌差は差損ねて口アングリ殘念さうに見送つた様が此句の味である。

句體の一寸巧みあるとされたのに、貝寄風といふ題に、秋鳥といふ人が

貝寄やちりしくばかり櫻貝

元來貝寄風とは春先き濱邊に春風つよめて波も亦荒い處から砂地に寄する貝さま〴〵の、しをらしさに、濱邊を逍遥する婦女が遊戯に貝を拾ふこと、摘草するやうに散敷くばかりとあるのは櫻花の趣きがある。貝寄風の句としては之に倍するものは余未だ知らず。

次は柳太刀といふ句がある、是は風に柳のほぐれつゝある様を太刀風烈しく斬結べるによそへたものだ。

君が代や緑に錆し柳太刀　（一　桂）

代は太平、戰は夢ほどの噂にもされず、素より抜く用なければ太刀は錆放題となつて遂に緑青と穿ち得たものである。句の狙ひは緑青といふのにあるところ俳句の好きな者はソレ味ふて可ならん。

經の座の灯火あかし彼岸雨　滋賀　村松　條道

○

ほろよひやうたゝ千兩春の宵　山形　北野　杉春

○

開山忌香のけふりや春くもり　大阪　小山　文二

○

渡舟場やおうと呼聲長閑なる　東京　野村　無常

○

聖典の一句も花ぞ　ひがん寺　岩手　藤原　耕人

○

春雨にうるほふ色の野山かな　津輕　土岐　學信

○

道端の草木も伸ひて旅たのし　大阪　沖　清高

○

麥畠日長につれて皺せわし　大分　石堂　一男

○

春うらゝおのか妻さへ化粧哉　東京　三部屋白雨

○

佇めば衿に靄にと　やみの花　東京　三部屋白雨

○

賑やかや孫彦やさ子灌佛會　姫路　内海　眞瑞

# 大楠公と佛教

村雨退二郎

愚地左近太郎聞書に、斯ういふ話がある。

ある僧が正成と會談の際に、

「今日の境界を助けよといふことが第一に肝要である。」

と言つたので、正成がその意味を訊ねると、

「大人（長上、權勢家）と爭ふ時は必ず負けるものだから、敢て之と爭ふのは愚である。宜く善惡邪正を言はず、進んで大人の仰せに從ふべきである。又大勢と小勢と爭ふ時は小勢は必ず敗れるのであるから、善惡によらず大勢の義に隨ふべきである。義は宜、卽ち時の宜きに從ふとの意味である。」

と答へた。正成は內心「古人ハ影母ノ地ヲ踏マザリシゾカシ、如何ニ大人ノ仰セナリトモ惡事ニ隨ヒテ謂行跡ヲ成シテンニ善事ニヤ候ベキ。大勢濁レバトテ、心有ル人是ト共ニ濁ランヤ。」これは佛法の教へではない、侯の邪道を勸むるものであると思つたが、其後ある禪師に會ひ、此事を問ふたところ、禪師は答へて、

「今日の境界を助けよといふのは、奸を以て世を渡るといふ意味ではない。大人に非のある時は一應是を諫め、用ひない時は卽ち止めようといふのである。强いて諫爭すれば大人には負るのである、大勢も亦其通りである。」

云々と答へたが、尙不滿足なので、忠圓僧正に此事を問ふたのである。忠圓僧正は、前の兩僧と略同樣の意見を述べた。

どこの僧侶も同じやうな事を云ふので、此度は正成も「仰せ殊勝ニ候」と苦笑して口を噤んだのである。其後南都般若寺の法印俊教に會つた折、又此事を談したところ、

「佛法の奧義はそんな事ではない、さういふ心では佛法は外典の心よりも劣るものであらう。或經文に善惡は今日の中云々とある心は今生では惡い事があつても惡へてはならない、唯今日ばかりである、善い事があつても喜ぶに當らない、これも今日ばかりだ。樂しも悲しみも、喜びも患も過去れば跡もない。何を以て始終の喜びとし、何を始終の患とするか。昨日は今日の夢であり、今日は又明日の夢ならんと觀ずべきである。愚なる衆生は此理を覺らず、不始終の樂を喜びとし、不始終の苦を憂ひとしてゐる、これは始終不苦不樂を悟らない故である。」

「今日の全身始終大事と覺ゆといふ意味は、今日の身の難を遁れ、病などを退治して身を

全ふし、佛法の大事を行ぜよといふのである。又一生の大事今日の我身と覺ゆといふ意味は、今日穢身阿難に對して佛法の深理を說給ふに、阿難若し疎かに聽聞して、佛意を覺らなければ、一生の行は徒事になるのである。これは佛法に限らず諸道の奥義を傳ふる日はまことに一生の中の大事の日である。」

「今日在身來日不可といふは、一身の無常といふことであつて、明惠上人は今日露命不消來日如何トカ定メンと仰せられてゐる。又今日の上の嗜といふことは僧俗ともにあるべき事で、毎日の謂行跡に私曲なる事なきやうに努むること一つ、行に怠りなきこと二つ、人に對しては信、智、義、禮あり、僧は慈悲深く俗は仁あつて、人の悪を云はず人の善を徒らに褒めず、世の善悪を事立てゝ云はず、私怨あるに酬いんと思ふことなく、佛の慈悲の殺生と觀じ國及世に仇ある者を禁じ、これらの心を今日嗜むべしと思ふべきである。」

と本題に入つて、

「日々に、今日は嗜むべしと思へば、少しも心に苦しみがない。唯今日の無事ならんことを思へとの意味であつて、今日の境界を助けよとはそれである。それをその様に、大人に私曲ありとも表面はそれに隨ひ、一身の安樂を計れなどとは、奸を勸むるものであつて、佛法の趣意は左様な事ではない。物を知らない僧の誤りか、あるひは賣僧が邪義を作つて傳へたのか、苦々しい次第である。」

と結んだ。正成は深く感じて、その後忍んで大德寺の禪師を訪れた際、それとなく此話をしたところ、禪師も亦俊敎法印と、詞は別であるが理は同樣の話をせられた。

「當時一身ヲ渡ラントノミ思ヒテ、國ヲ利シ衆生ヲ度セント思フ心ナキ僧ノ說法ニヤト思フナリ。」

と正成は前述の某々僧等を排し、

「政道ノ邪魔トナルハ不直ノ奉行ト佞奸ト修トナリ、中ニモ賣僧ノ知識ナリ、賣僧ハ佞ニハ劣リ奸ニハ益シテ政道ノ障トナルモノナリ。」

「小松大臣ハ禪法ヲバ知給ハザリシ人ニテ御在マシケルガ、後生ヲ恐レ、神罰ノ家ニ來ランコトヲ歎キ給ヒテ、父ノ相國禪門ノ惡行ヲバ堅ク諫メテ止メ給ヒシ。義時、泰時ハヒソカニ禪法ノ奥義ヲ究メシナドト云ヒシ人ナレドモ神罰ノ重キヲ思ハズシテ、下トシテ君ヲ流シ奉リテ王法ヲ覆ヘシテ年久シカラザリシ。是神罰ヲ恐レズ佛法ヲ信ゼザル者ノ、マコトノ忠ナキ證據ナリ。」

と清盛、義時、泰時等の僞信仰を戒し、更に亂世を橫行する賣僧の多きを嘆じて、

「正行ヲ始メテ、和田殿、恩地殿其外家ノ子郎等ニ至ルマデ、少キヲモ惡ヲバ止メ、佛戒ヲ持チ給ヘ。諸人ニモ勸メ給ヘ。智識ヲモ請ジ奉リテ、僞實ノ佛法ヲ聽聞セヨ。」

と諭した。

特に御曹子正行に對しては、折にふれて佛神の敬すべき所以を諭してゐる。

「後世ヲ恐レテ惡名ヲ留メザルノ行ト謂トヲ專ラニスベシ。正行ガ行ヲ以テ子孫マデ家ヲ全ウシ、國ヲ治ルノ行ヲ雖ナスベシ、是亦虛ナリ。又身ノ後ノ世ヲモ願ツテ行ズベシ、

神佛ノ罰ヲ恐レヌレバ、行ヒ ニ惡ナシ、コレ國家安全ノ端ナリ。」

「上、三綱五常の義を嗜まずして、何ぞ諸人直からんや。」といふ正成の精神であるから、

「不覺ニシテ道ヲ知ラザル者。一向ニ愚ニシテ一命ノミヲ重ンジ道ヲ輕スル者。一身ノ榮花ヲノミ願ハン者。飽クマデ修リノ有ラン者ハ、如何ニ勸ムルトモ誡ムルトイヘ不道ノ行跡ノミナランカ。是等ノ者ハセメテ佛神ノ罰ヲ恐レテコソ修ル心モ少シハ止マメ。又親ニモ孝行シ、主ニモ忠心ノ出デ來ランズレ、又親ニモ孝行シ、主ニモ忠心ノ出デ來ランズレ、又主ニ慈悲ノ心有ナン、一切ノ無道モ自道モ自然ニ止ミナン物歟。傳へ聞ク、天竺國ニハ、佛法ヲ以テ國ヲ治メタリト。此故ニ佛法ハ王法ノ外護ナリト聖德太子モ宣ヒシ。上代ハ人ノ心モ今ヨリハ直ニシテ、智アル人モ多ク、五常ヲ嗜ム心モ最モ深カリシサヘ。上御一人ヲ始メ奉ツテ、臣ヨリ下民ニ至ルマデ、後ノ世ヲ願フ心意リナカリシゾカシ。」

と觀じてゐるのである。

多田滿仲法師は、每日缺かさず法華妙典一部を讀誦し、稱名念佛一萬遍を唱へたといふことであるが、此人は惠心僧都の御弟子で、天台の奥義を究め、法相、三論の學にも暗からざる篤信者であつて、愚昧な下民をして道を立てしめんとして、斯く努めたのであらうと解し、上宮太子の馬愼未來記を引いて、無智の人に禪の法は誡むべきであるとし、

「神武ノ帝ヨリ已來、數千歲、王法ノ盛ンナリシ事ハ……諸人神罰ヲ恐レシ故ナリ。加之、佛法和朝ニ渡ツテ三世ノ因果ノ理ヲ恐レシ故ト覺エタリ。義時、泰時、ヒソカニ禪法ノ奥義ヲ惡ク學セシ故ニ、表面ハ佛神ヲ信ズル樣ナレドモ、奥ノ心ハ本來空ニシテ因果ナシナドト學セシ故、神罰ヲ恐レズ、後鳥羽院ヲバ流シ奉リシゾカシ。凡ソ彼の泰時ハ仁義ヲ專トシテ道を行フ、今ノ世ノ聖人ニヤハ愚人モ驚ク計リナリシゾカシ。此人サヘニ下心ニ神罰ヲ恐レザレバ、斯ク不道ノ行跡アリシゾカシ、マシテ尋常ノ仁政モナキ人々、三世の因果ナク、又神罰ナシ、空ヨリ生ジテ空ニ歸ルナド、覺ラン人、豈無道ノ行跡ナカランヤ。」

等と訓へてゐる。さうして、仁義の道を行ふ根本は、佛の教へを深く信じ、神罰を恐るゝところに在るとした。

「サレバ正成ガ家ニ不禪ノ僧來ツテ法ヲ示サバ、家久シカラズシテ、必ズ亡ブベシ。子々孫々ニ至ルマデ、不禪ノ僧ヲ尊崇スルコト勿レ。」

これを以て見れば、當時亂世の人心動搖に乘じて、如何に似而非佛教が、上下に浸潤してゐたかを想像できる。さうしてその害惡が如何に人心を壞敗してゐたかに就いて、

「不禪ノ說破ヲ面白シナド思ヒテ尊崇セバ、家子郎等ドモ皆彼法ヲ尊崇スベシ、然ラバ郎等家子等奧ノ心ニ神佛ヲ敬フベカラズ、神罰ト因果ヲ恐ル、心ナカルベシ。是ヨリ不忠不孝一切ノ不道發ツテ、國法次第ニ破レ、國家必ズ亡ブベシ、彼法ノ事、郎等皆面白シト思フテ後ハ、如何ニ禁ズルトモ叶フベカラズ。能々此旨ヲ心得ベシ。」

といふ訓戒に依り其程度を知ることができるのである。

「佛法ノ事ニ法ナシト申侍レバ、天台ト眞言ト法相ト禪ト、詞ハ別ナレドモ、理ハ以テ同ジカランカ、法身ト本分ト眞如ト、異名同理ナルトヤラン承ハリ候ヒシ、佛法ニ異ル見解アルハ、唯智識ノ解智ノ邪正ナルベキニヤ。」

專門外だけに、斷定を避けて、輕く自分の見解を述べ、

「但シ正行長生セバ、上京ノ次ノ便ニハ、如何ニモ密シテ禪ノ法ヲモ聽聞スベシ。法相天台ノ事ハ申に及バズ、能々深理ヲ聽聞セヨ。國ヲ治メン者ハ少クトモ佛法ト神道ノ事ヲ知ラザレバ、大愚ニシテハ治國ノ法ニモ誤リ有リテ、邪曲ノ事アルモノ也。」

こゝでは神道と佛法の區別が示してあるが、然し全體として正成は、兩部合體を信じてゐたと見るのが至當である。

以上に依つて、恩地聞書に現はれた正成の佛教的信仰を紹介した心算で、これを批判するのは專門家の仕事であるが、これを通じて見てよく分るやうに、大楠公は用兵籌戰の巧妙な戰術家である以上に、非常な精神家であつて、公の卓拔した精神家であることが、一つには悲劇的英雄としての公に對する一般國民の敬慕を喚起し（足利方の梅松論さへ公を賞讃してゐるのである）、二つには數多き忠臣中の富嶽として尊崇される所以である。

この聞書の筆者恩地の名は、太平記に屢々現はれるところで、藤井懶齋の和漢太平廣記にも、

「楠正成死ヲ決シ、兵庫ニ往クトキ、正行ニ櫻井ノ宿ニ警誡シテ曰ク、汝幼年ノ際ハ、和田・恩地・矢尾等ニ父トシ事フベシ。每事母ニ謀ルコトナカレ」

とある。恩地は和田と同樣楠氏同族の老臣である。

「又學問ニ懈ルベカラズ。已ニ十五ニ至ラバ專ラ義理ヲ聞キ、字ヲ識リ語ヲ記スルヲ要スルコト勿レ。唯文意詳審、內ニ精熟セシムベシト。善哉言也。今之武人、或ハ學問益ナシト言フ。正成ガ意ト異也。」

尊氏、義貞の勤王は、動機に於て正成とは雲泥の差があり、純忠至誠、孤軍奮鬪、王政復古の魁として功勞無比の大楠公が、中興政府の論功行賞に於て、報ひられる處の餘りに尠少であつた事に就いては、今日小學兒童すらも不滿とするところであつて、藤井懶齋にも、

「楠正成ハ本朝ノ孔明歟。後醍醐帝ノ爲君昭烈帝ニ不逮者遠シ。渠之將相ニ不至所以ナリ。」

と論じてゐるのであるが、成上りの公卿政府の有頂天から來た批政に眉をひそめながらも、尙能く最後まで南朝のために志操を變へず、奉公の誠をつくしたといふのは、一に大楠公の精神が、確固とした信仰の上に立つてゐたからである。

（終）

生活體驗

# 盜まなかつた金

神戸　福井貞助

　その頃、私は或官立工場に働いてゐた。私は正直で勤勉だと見做されてゐた。ところがその勤め先の工場に手癖の悪い者が混つてゐるらしく、時々石鹸とか傘とか、時には蟇口まで無くなつたことがあつた。私もその被害者の一人だつた。で、そのコソ泥の裏を掻いてやらうと色々探つて見たが、まるで雲を摑むやうな相手で、迚も根氣が續かなかつた。

　ところで、さう云ふ私は何うだつたかと云ふと、薄給の上に經濟觀念が乏しいので、絶えず借金で責め立てられてゐた。『金が欲しい金が欲しい！』と腹の底では何時も叫んでゐた。金さへあつたら、かう云ふ生活から浮び上れる、そんなことばかりが心中を往來してゐた。

　私は他の人より早く出勤する習慣があつて或る時何時ものやうに、煖房裝置に蒸氣が通じ始める時に工場に這入つてゐた。そして私は蒸氣に身體を溫めながら、なんとなしに、チユーブと壁との間に手を突込んだのである。

『蟇口のやうだ。』

と私は直感したが、『こんな所に變だなあ』と思ひながら、取出して見た。

　成る程大きな蟇口だ。皮も捨てる程古くはなつてゐない。私は蟇口を開ける勇氣はなかつた。たゞギユッ／＼と腹を摑つて見るだけだつた。

『こいつは確かに金が這入つてゐる。』

　私は中も見ないくせに、その金で給料日に必ず差引かれる借金を幾らかでも補へるだらうと云ふやうな想像をめぐらしてゐた。その蟇口を自分のものにして仕舞はうと考へるともう胸はどき／＼してゐた。

　だが、用意周到、いや臆病な私は尙萬全を期したかつた。ひよつとしたら誰かが例の盜難を恐れてそこへ藏つて置き忘れたものか、或ひはまた盜人が一時そこへ隱しておいたものかも知れない、だからこんな處に蟇口が置いてあるんだ。若し落したのであつたら、こんな處は探せば直ぐ解る、――要するに置いてある品物なら、私が今盜めば直ぐ皆んなが騷ぎ出すに定まつてゐる。

　私は、そこで、その蟇口をもう一日そのまゝにして置かうと考へた。一日二日經つても同じやうに置いてあれば、もう誰れかが忘れたに決つてゐる。さう考へて二日その蟇口をそのまゝに放置しておいた。

　その二日目の仕事の終りに、滅多に掃除することのない煖房の間へ箒をあてた者があつ

て、蟇口が出て來て仕舞つた。

その蟇口はどうやら落したものであつたが落した人間は工場外で失つたとばかり思つてゐるらしい。私は自分の用意周到に苦笑せざるを得なかつた。蟇口の中には私の欲しい拾圓札もあつた。だが、何處か心の隅にほつとした感じがあつたのを隱すことは出來なかつた。

さて、その蟇口を落した人間は、當時關東の大震災で大阪に來てゐた避難者の一人だつたが、年齢も私と同じ位で、その後彼と私との間に厚い交友が出來た。彼は間もなく工場を止めて東京に歸つたが、手紙の往復は絶やさなかつた。一時は青年期によくある懷疑的な思想に陷込んで悲觀的なことを云つて來たりしたが、その度に私は彼を勵ましたりした。六七年も經つた時、彼は東京京橋區の手堅い出版所に勤めて、將來は出版事業に活躍すると云つてよこして來た。

間もなく、私も工場を罷めて、ある勉強のために上京したことがある。その時彼は實によく世話をして呉れた。限りない親切と云ふ言葉以外には云ひ現はしやうもないものだつた。私は何時かこの友達の人格を尊敬し、良い友を持つたことを深く感謝するやうになつた。

この人の蟇口を私が盜んでゐたら、かうして世話にならなければならないこの人の顏を見る度に、僕は今よりどんなに苦しいか知れない。因緣と云ふものは恐ろしいものである。あの時蟇口を盜つてゐたら、若しかして私はその他の盜難事件の濡れ衣まで着なければならなかつたかも知れない。それから見れば、私は苦しみながらも幾らか救はれた氣がする。そして、私の生活上の最も大きな教訓にもなつてゐるのである。

彼の前にこの懺悔話を持ち出せないことは今の私のたつた一つの心の負債なのである。

## 左甚五郎に一本！

日光名物、東照宮の眠り猫を見た修學旅行の一小學生が

『あの猫は眠つてゐないや、猫はあんな風に足を立てゝ眠やしないよ』

と云つたので、これが大問題になつたそうです。誰か研究した人がありますか。

# 信仰相談

（解答）中村康辨

## 追善回向は何んのため？

（問）生前信仰のなかつた者が如何に荘厳丁重な葬儀を行ひ讀經したとて、それを其靈が感得して成佛するとは思はれません。若しそれで成佛出來るなら生前信仰を得なくてもよいやうに思はれます。之が私の解き得ない謎です。

（奉天　辰川貞一）

（答）御尤な御質問で、かなり多數の方々がかうした疑問を抱かれて居る事と存じます。私も故人に對して一度追善回向した丈で、生前に信仰がなかつたのに、一足飛に成佛するとは信じられません。なぜと云ふに成佛とは最も完全な「覺」に達することだからであります。然し決して無駄な事だとも思つて居りません。御承知のやうに一切の現象は、緣起一個一個であります。緣の中にも近緣あり親緣あり强緣あり。其他遠緣弱小、或は直接的なもの間接的なもの、一見無關係に見えるものなど色々ありませうが、何等かの意味に於て關係してゐないもののないことは既に佛教の教へて居る通りだと存じます。然かもそれら諸緣のうち最も近く親しく且つ度數の重ねられて行くものが强い力を有して居ることは、日常私達の經驗するところであります。ですから亡くなつた故人に對して親近者が追善回向することが何の影響もなく全く効果がないとは考へられないことであります。出來るなら絶へず其冥福を祈ることこそ親近者の務めでもあります。否な寧ろ生前信仰を得て居た人よりも得て居なかつた方に對しては一層度數を重ね一層丁重にして上げれば、殘された子なり親なり兄弟なりの義務も果されないし、また生き殘つて居る者の氣持も落着けないのではないかと存じます。梵網經には七日七日に追善することが亡き人に對する孝養だと云つて居りますが、我國では聖德太子樣の頃から、此孝養に就て七七日百日一周年三年七年乃至百年百五十年等に追善をなすことを夫々階級に應じて規定を設けられ、それが今日まで子孫たるものの當然な務めとして續行されて來て居るのであります。一周忌後の三年七年十三年七年などの三七の年を記念するのは支那の忌服の風習を取入れて、佛教の儀式とせられたものだとの事です。其中心の意味は佛教で云ふ孝養にあるのでせうから、誠心誠意を盡くして亡き靈のよりよき向上を祈念することは、それが何の程度まで響くかと云ふ事よりも、爲さねばならぬ當然な責任でもある譯です。卽ち單なる功利的な効果があるかないかに依て片付けられる

やうなものではないと存じます。然し一歩讓つて効果と云ふ意味に於ても前述の通り親近者の强い念願が、其靈のよりよき向上に對して影響を與へない筈がないのですから、それがよし一足飛に成佛と云ふ最上な目的にまで達せられないまでも絶へず新念し絶へず回向する時、終には成佛にまで到る事も出來得る推定も出來る譯です。ですけれども生前に於て正しい信仰を得て居られる事に越した事のないことは云ふ迄もありますまい。尙ほ回向の意味に就ては第二卷第一號卽ち一月號を御參照下さい。

## 死の恐怖を脫れたし

（問）三月號所載「惱みと信仰」を讀みほぼ小生の惱みは解決したやうですが、死の恐怖に就て如何にしたらよいか分りませんからそれを御敎へします。

（三重　杉江生）

（答）信仰に依て死の恐怖からのがれ得るか何うかと云ふ御敎へのやうに存じます。信仰に入る原因として昔から死生觀罪惡觀などが數へられて居るやうに、死の恐怖から信仰を求める心も起り、やがて安心立命してさうした恐怖も解決し、消極的であつた今までの生活がスッカリ落着いた明るい積極的な正しい活動の出來る人になつたと云ふことは「妙好人傳」などにも澤山實例のあることですから、誰にしても眞劍に道を求めるなら解決出來る筈であります。と申しますのは念佛の信仰は自分の凡てを如來樣にお委せして如來樣の大きな命の中に自分の小さな命を投込んで仕まふので、自然に死の解決が出來るからです。私達が如來の大慈悲のホンのすこしでも味ひ得れば、私達の感情は如來樣の方で凡て適當になすつて下さるであらうと大船に乘つたやうに安心しきることが出來るのが信仰の事實です。阿彌陀經の中にも「阿彌陀佛の國に居る人は阿彌陀佛が壽命無量であるやうに永遠の生命が與へられて居る」と云ふ意味のことが云はれてあり、善導大師と云ふ方も攝生增上緣と云つて「私達の生命をスッカリ攝め取つて行く强い力」が加へられる旨を云つて居られるやうに、自分の力では何うしやうもないのが如來樣に歸命することに依て、一切萬事解決させて貰ふことが出來るのですから死生共に心配はいらない事にもなります。さればと云つて決して命を粗末にしてよい譯ではありません。念佛信仰の體驗を深めて充分な信仰的活動をする爲には、此の粗末な身體が極めて大切で、寧ろ此身體が資本でさへありますから出來る丈健康にも注意し、出來る丈長生きするやうにすべきであることは既に法然生人の御法語の中にも御座います。唯だ根本的な信念が如來樣に委せ切ることにありますので、命のある限りは出來るだけ働かせて頂き、若し此世の緣が盡きたら、如來樣の子として淨土に於て修行し、何時でも再び此世に來て出來るだけの活動をさせて頂くのですから「死生共に煩らいなし」と云はれた法然上人の御信仰を私達の規範として、現在に於ては念佛に依て自らの信仰體驗を深めるやうにしたいものだと存じます。

## 佛心と實際の生活

（問）阿彌陀佛の本願力に乘托した信念は一切の行ひを絶對他力に歸納せしめ、佛心のまゝに行動することで、それこそ永劫の將來に向つての白道であると思ひます。徹溫的な眞俗二諦說や、總顯回向攝取の信行不二の相離說などでなく、念佛さへ忘れ果てた乘本願力の絶對道でなくてはならぬ。唯だ自然に聲に出て來る報謝の念佛であると信じます。何時迄も第一年生の口稱念佛に執着することなく、實證念佛の眞に生くることが本當の信仰だと信じて居ますが如何でせうか。

（品川大井　樹下一活）

（答）御仰せの通り佛心のまゝに行動することは私達の望む處ですが果して私達の現實生活が佛心のまゝに行動されて居るか何うかは大いに疑問の存するところであります。一たび信仰に入ればもう完全であり、私達の日常は凡て如來樣が行動させて下さつて居るのだから、もう道德律から超越して善惡共に阿彌陀佛の行動であると主張する人もあつたさうですが、それは少し行き過ぎて居りはしないかと存じます。それが十目の見る處、全く佛心具現の活き佛とも云ふべき完全な人格者なら、實に立派なもので、私達は無條件で其人の前に額づきたいと存じますが、本願力に乘托した生活が何う云ふ次第で念佛を忘れ果て得るのでせうか。實際上佛を忘れた佛心と云ふものがあるのでせうか。また人間生身でありますから勞れることもありませうし、睡眠慾食欲性欲等の生物自然の欲も起りませうが、それらも佛心的行動なのでせうか。既に如來樣の御意志のまゝに私達の日常生活が營まれるならば、私達の言動は私達自身の責任でなく、私達は唯だ人形であつて、私達自らの人間的な意志や感情はスッカリ淨化されて、謂ゆる「佛心者大慈悲」の凡ての者を我子の如く慈しみ悲しむ氣持に滿され且つそれが行爲に現はれて居らねばならぬ筈だと存じますが、さうなつたら私達は其まゝ完全に阿彌陀佛それ自らでありますからもう信仰を必要としない筈です。御仰せの如く絶對の他力を信ずる事、眞俗二諦に分けない一元的生活をする事、無論異議はありませんが、唯だ私達の現實生活が果して完全に佛心と相應して居るか何うか若し相應して居るならば絶對の他力を信ずるを要せぬばかりでなく絶對他力其ものである筈であるが果してさう自覺してよいかどうかもつとよく反省して見る必要はないでせうか。また口稱念佛は幼稚であり、報謝念佛とか實證念佛とかは高等であると云ふ意味と見られるやうに仰しやられて居りますが、口稱念佛の內容　報謝念佛實證念佛の內容を承らない限り其優劣を定める事は困難であります。口稱念佛とは理念の念佛觀念の念佛と區別した言葉で、報謝念佛は口稱念佛の一種に屬して居ります。ですから無論單信口稱の念佛と云ふ具合に其內容を說明する言葉を冠して初めて報謝口稱念佛（それも咨嗟感謝佛々想念等の區別もありますが）との相異も識別される譯です。また御尋ね中の總顯回向攝取と云はれたのは何う云ふ意味なのでせうか。三つのものが併列してあるのか、又は三つが一つにくつ付いた一つの成語なのかよく判りませんので御答へが出來かねます。

# 戒名の差別は？

（問）一、御浄土は一視同仁だと存じて止まない者ですが如何？

二、戒名に善悪をつける様に思ふが如何なる譯か。

三、院號居士なぞ皮相の解釋乍らよき相な文句が記入されて居ります。また自然に生前の操行に依つて別れ〳〵になる事と思ひますが、御出家が勝手に御命名あり、亦御金の如何で再び名が變る。これも何時の間にか出來上つた弊害でしやう。希くば本名其儘に平等に、官位のある方に官位御記入も可ですが、佛何々とか俗名何々とか御改正願ひ度いものです。戒名に假に善惡があるものとしそれに一規定のあるものだとしたら祖先考道の爲又子孫のため如何か。

（答）御尋ねの中心問題は戒名の事と存じますが、「戒名」と云ふのは一般的に昔しから云ひならはして來た言葉で、本當の意味は佛教の「戒」を受て教團に歸入した印の名前でございます。一番簡單なのは歸依三寶即ち佛（覺者）佛法（覺醒すべき規範）佛僧（覺醒せる團體）の三に身も心もまかせる事を三歸戒と云つて佛教々團に入團する時致しましたもので、その時名前がつけられるのです。例へば釋尊が一番最初に佛教として話をした五人の苦行者の一人憍陳如が御話を聞いて直に納得し一番最初にお弟子になりましたが、其時阿若（悟れる）と云ふ名を付けられましたので、それから阿若憍陳如と呼ばれるやうになりましたさうです。其後釋尊の御話が一般の人々になされるやうになりましてから、五戒（生活規範）が云はれるやうになり毎月四回會合して懺悔反省して自分をよりよくする修養日と云ふものがきまり、其日には特に三戒丈增して八齋戒と云ふものを守りました。これが「戒」の初めです。それから教團が段々賑かになり教團の律律を作らねばならなくなつて「律」と云ふものが出來ましたが　後世「戒」と「律」とゴッチャにして「戒律」と一口に云ふやうになりました。元來「戒」は道德規範であり「律」は教團の法律であります。然し通常小乘戒と云はれるものが「律」で、「大乘戒」と云はれるものが「戒」です。偖て誰かが出家しますと「戒」が云ひ渡されます。本當は「律」ですけれど「戒」と云つて居るので、其時の名を戒名と云つたのでせう。實は法名であり出家名であります。處が支那では御承知のやうに名前は大概二字ですから僧名も二字になりそれが其儘日本にも傳來して二字で僧名を現はすことに定まつてしまひました。現在日本で行はれて居る授戒は大乘戒ですが、矢張在家の人にも戒名として二字を付けて居ます。以上が大體戒名の緣由ですが、法然上人も「無戒名字比丘」と云つて、此頃は戒の無い名前丈の坊さんとなつて仕舞つたと云はれて居ますやうに、戒を受けた處で實行力がないから、實は戒名ではなく佛教々團へ入つた記號見たやうなものでよ。けれども古來からさう云ふ習慣になつて居るので、僧侶になりますと師匠から法名を付けて「何々」と呼ばれ俗名を改めて戸籍面まで變更致します。それで一人前の坊さんになると和尚とか上人とかの字がく付き、信者には信士信女とか居士大姉とかをくつ付けて區別致し

した。信士の方はもと三歸戒五戒八齋戒など受けた人を云つたのでしたが、一般佛教信奉者と云ふ輕い意味になり、居士の方は財に居る佛教徒又は家に居て佛道に精進する人と云ふ意味が、初めの方の意味丈になつて財産家に付けられる事になつた譯で遂に大名には「大居士」などと大の字をきへくつ付けるやうになりました。また「院」と云ふのは總名の寺に對して、別棟を「院」と云ふので、別院の意味でしたが、日本で天子樣が御位を御讓りになつて別の御殿に御住ひになると、其御所を「何々院」と云ひましたから、御崩御になりますと「何々院の天皇」と呼び奉る事になり、更には公卿が出家して別院を建てて其處に住みましたので、貴い御身分の方々を「院家衆」と云つて一般平民と區別した官家の風習が出來ました。德大寺とか西園寺とか云ふ苗字も其院家の事から來て居ます。それが後世武家政治になりまして（足利尊氏は等持院を建て等持院殿と稱す）將軍樣や大名などが「何々院殿」と云ひ、降つて旗本なども「殿樣」と申しましたから矢張り「殿」をくつ付けて何々院殿と付け、それから更に降つて財産家に「院」を付け、日蓮宗などでは何う云ふ譯か知りませんが「院日號」と云つて大概の人に院號を付けたものですから、他宗の信者も體裁が惡いとか何とか考へ始めて矢鱈に「院號」を請求し盛んに御寺の住職を困らせたものです。でも大概家の格式に從つて昔の儘に戒名の差等が維持されて居りますが、中には寺への功勞と云ふ事で以前よりよい戒名が付けられる事もあります。是も亦た人情の然らしむる所でせう。其外宗旨に依る色々なものがあります。日蓮宗の「日號」眞言宗や淨土宗の「譽號」などですが、禪宗などでは戒名の上に道號を付け四字名にするところから「何々何々信士」と云ふやうに、一般の戒名にも四字が付けられ、其上に譽號がつくと「何譽何々何々信士」となり段々字が殖えて行つた譯です。ですから貴郎のやうに無茶苦茶に勝手に付けるのは變で、大々理由があつたのです。今は大變亂れて居ますのはよくない事と存じます。夫れにしても大體戒名には熟字がありまして、佛教術語を其人の性格に合せて考へるのですから、變な字を付けたら夫こそ世間の物笑ひになりませう。以上で大體御判りの事と存じますが、信士とか居士とかの上の二字が本當の戒名で、其上にあるものは別號です。ですから眞宗などでは何んな人にも二字しか付けません。之も徹底して居ますね。でもやはり別に院號などを付けて居りますから、時代の變遷とか人間の氣持とかには勝てないものと見えます。

何れにせよ今では戒名の事などは信仰上の問題でなく、字數の增加は世間の機嫁から來て居る事と思ひます。

### ◇投稿に關する御注意

御投稿は筆書又は封書でお送り下さい。但し封書でお送りになる時の質問用紙は四百字詰原稿用紙一枚以內に認めて下さい。たび〳〵申すことですが、文字は楷書ではつきりとお書き下さい。誌上の匿名變名は御自由ですが、投稿には必ず本名をお書き下さい。編輯部では秘密を嚴守し、且つ誌上に發表された讀者の住所氏名は、本人の許可なくしては絕對にお教へ致しませぬから、その點御安心の上、どし〳〵御利用さい。

# あふひ草

## 或る師との信仰問答

法然上人法語新釋……其一

中村辨康

私は今は或る師に就て念佛にいそしんで居る者である。元來がお坊チヤン育ちであつたせいか、誘惑に對して抵抗する力が極めて弱く、遂に荒みひねくれた氣持になつて馬鹿な、そして損な事ばかりをして居たのである。その爲に十八九から十何年と云ふ最も大切な若い時代を毫無しにして仕舞つたのだつた。

何う考へても私と云ふ人間は本ものではない。イヤにすねた氣持ばかりあつてアッサリして居ない。隨つて邪氣が多く醜劣さも多い。見得坊も人一倍強く、友達がグングン自分を追拔いて名をなして行くのが、たまらなく妬ましかつたのである。だからそのイライラする煩惱の火は、次第に私の中にある善良な素質を燃やして、丸で惡魔の子のやうな氣持にさへして仕舞つた。全くお話にならぬやうな生活をなしつゝ下らなく半生を過して居たのであつた。

私は何も敢へて自分の醜い過去を語らうとするのではない。唯だ之だけ云つて置かないと是から語らんとする私と師との問答の底に流れる意味が徹底しないかも知れぬと思つたからである。

何れにせよ、身から出たさびではある。さびの原因は外にもあらう。然し夫れを云ふのは今更愚痴に過ぎない。自

分を磨いてさへ居れば、さびの付く筈もなかつたのである。實際機縁と云ふものは何處にあるか分らないものである。私は不圖した事で、今の師に遇つてスッカリ生れ更つたのである。一時は出家になつて修養に專心したいと思つたけれども、師から「信仰は特別な條件を要しない。其儘で生き抜くのが本當である」と諭されて思ひ止まり、時々師を訪ねては尊い御法を承りつゝ修養に勤めて居る。

此頃になつて私は後日の思ひ出に、師から導かれたあとを書いて見たいと思ひ初めた。或は師の御話の意味を取り違へて居る處があるかも知れぬが、それは私の至らぬところとして豫めお詫びをして少しばかり書いて見ることにしたい。

× × × × ×

かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ。今日もまたむなしくあけぬ。今いくたびか暮し、いくたびかあかさんとする。（藤井實應氏編法語抄五）

夫れあしたに開くる槿花は夕の風に散り易く、夕べにむすぶ命露は朝の日に消え易し。是を知らずして常に榮へん事を思ひ、是をさとらずしてつねに有らん事を思ふ。然る間、無常の風一度吹きて、有爲の露長く消えぬれば、之を曠野に捨て、之を遠き山におくる。かばねは遂に苔の下にうづもれ、たましいは獨り旅の空に迷ふ。妻子眷屬は家にあれども伴なはず、七珍萬寶は藏にみてれども益もなし。唯だ身にしたがふものは後悔のなみだなり。（同六）

× × × × ×

考へて見ると、もう五六年も前である。

初めて師に遇つた時、私はこんなやうな事を尋ねて見たのだつた。

「私は人生なんて本當にくだらないものだと思つて居ます。私の自暴自棄がさう思はせて居るのかも知れませんが、唯だ五十年か七十年の人生を好いの惡いのと云つて、威張つて見たり悲觀して見たり、或は哭んで見たり泣いて見たり、たりたりづくしで一日一日過して行くのは、全く馬鹿氣きつた事で、誰にしたところで死んで仕舞へば、それつ切りではないかと思ひます。たまたま名譽ある地位を得て人から何とかかんとか云はれる身分になつたとした處が

またしこたま金儲けをして財産を造り、仕度い放題の事が出來るやうになつたとした處が、それで果して人生の價値を完全に摑み得たとは思はれません。それらは唯だ或る機緣に甘く乘じたのであり、一時の榮華を夢みた丈であつて永遠の幸福でも何でも無いと存じます。私の如き世の中をすねたひねくれた者でもさう云ふ一時的な榮華に對してかなり強い反感も起きますが、また一方には道を求めたい、何とか生きる價値を發見したいと思つても遂にまだ不幸にして私を納得させるやうな話しをして呉れる人がありません。私は今は自暴自棄に陷入つて居りますが、內心では正直のところ、やつぱり正しく生きたいのです。人間生活の何處に本當の價値かあるのでせうか。」

かうは尋ねたものの實は別段解決を期待して居るのでもなかつた。然し師は靜かに話して呉れたのである。

「人生をくだらなく感ずるのは、まだ本當に人生を知らないからではないかと思ひます。考へて見て下さい。私達の爲す仕業は何んな微細な事でも何かの意味に於て社會に影響を與へずには居りませんでせう。動物の呼吸と植物の呼吸とがあい關係し合つて居るやうに、私達には本當によく判つて居ないけれども、物質的にも精神的にも一切のものと複雜微妙な關係を持つて居るらしい事は想像されます。

隨て直接關係して居る人間の社會に、お互同士相影響し合つて居ない筈はないと思ひます。社會通念とか時代思潮とか云はれるものは、其影響の綜合された複合寫眞に外ならないのです。ですから其時代のより多くの人々が比較的ではありませうとも、正しい思想を持ち正しい行ひをして居ますならば、其時代の社會思潮も亦た中正なものとなるべきです。然るに正しい者よりも利己的な物質主義の人が多いものですから、何時までたつても佛教の謂ゆる「五濁惡世」が改まらず世の中が濁つて居るのです。貴君の自暴自棄と云はれた氣持も、個人主義の上に立つて居ればこそ出て來るもので、元來バラバラでないものを勝手にバラバラと考へて各自自我中心に行動するものですから、其處に行詰りが起き、色々な弊害が生ずるのです。そして順境に居る者は一時的な榮華に浮れ、逆境に居るものは反省もなく怨みを飲んで貧困苦惱と戰ひ、あたら一生を空しく過して仕舞ふのです。限りある人の一生を、若い時分には五十年とか七十年とか申しますと何となく長いやうにも感ぜられますが、振り返つて見れば誠の夢の間の一瞬に過ぎません。いざ死ぬと云ふ瀨戸際に來て、今更ながらにくやんだ

とてもう間に合ず、徒らに輪廻の苦しみを繰返へさねばならぬとは實になさけないではありませんか。中には死のか、なたは虚無で何もないと考へて居る人もかなりあるやうですが、果してさう簡單に片付けられるものでありませうか、頗る疑問であります。若し云ふが如く「死」に依て一切が清算されるならば、何んな惡い事をしても遁れるだけ遁れて死んで行けばよい譯で、社會の秩序もなにもあつたものではありません。正直に正しく生活して居る者は寧ろ馬鹿な骨頂です。世を擧げてだまし合ひ盜み合ひ殺し合ひをしてそれで死んだらよいなら、だまされたもの奪はれたもの虐げられたものこそいい面の皮だと云ふ事になります。さうなつたら人間はみんな惡魔の權化となつて仕舞うでせう。天地の道理はそんな御都合のよい單純なものではありまいと思ひます。火が熱く氷が冷たいと同樣に、善惡正邪の區別は昭々として易らないのが天理です。無論複雑した社會でありますから、今日の事が今日直ちに結果を示すとは云へないでせうが、蒔いた種は何時かは芽を出さずには居ないでせう。人間の習慣情性と云ふものは其人の顔面の皺まで變るものです。況して天地自然の道理と云ふものは決して死んだからよいわと云ふやうな大ザツパな寛大なお人よしではありません。大無量壽經には

「命まさに終らんとして悔ひを擺れて交もいたる。豫め善を修めず、窮りに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆとも果た何ぞ及ばんや。天地の間には五道分明なり。恢廓窈冥、浩浩茫茫たり。善惡報應し禍福相承け、身自ら之を當く。誰も代る者なし、數の自然なるをもつて其の所行に應ず。殃咎、命を追ひて縱捨することを得ることなし。善人は善を行ひて樂より樂に入り、明きより明きに入る。惡人は惡を行ひて苦より苦に入り、冥より冥に入る。かくの如き世人、つぶさに盡すべきこと難し。故に自然の三途無量の苦惱あ

り。其の中に展轉して世々累劫に出期あることなし。解脫を得がたし。痛み言ふべからず」と

云つて居ります。國家社會の秩序を維持する爲にすら、法律や刑務所が作られて居ます。天地宇宙の秩序は照々靈々として居り、その自然の牢獄自然の受苦は斷然のがれる事は出來ません。人の眼は胡麻化し得ても天地の大道は誤魔化されない筈です。

だから個人主義の上に立つて考へるところの人生がつまらないか下らないかの論よりも、自分自身の天地人相互關係の複雜廣大なるを忘れて居る考へがつまらないか、下らないかを反省して行く力が本當です。

私達が現に人間として生きて居る此の事實は疑がふ事の出來ない事實です。そして少くとも父母の恩國家の恩天地の恩に依て今日迄生かされて來たのです。其境遇が幸福であつたか不幸であつたかは單に物質的に惠まれて居るか居ないかの相違丈で決められるべき問題ではありません。大處高處に立つて人間一生の禍福を見る時、果して誰が幸福であつたか、不幸であつたか外觀丈では分る譯がありません。何んなに社會改造を行つても、人間賢愚の別や努力の如何や周圍の關係や性質の如何などで其獲得するところの結果に異りを生ずるのは何うしやうもない事なのですから、皆な平等に貧富苦樂の別なき狀態にはあり得ないものです。何處まで行つても差別のある個人的な自我主義よりも、其自我觀念を破つて一切を抱擁し一切を許るし合ふ平和融合の世界を發見する事が現實的に緊要な事です。花咲爺の噺の中にある慾ばり爺さん見たやうな自我的物質欲からする瓦や石かけばかりを掘出さずに、精神的光輝が燦然として輝く正直爺さんの寶物を發見することが本當ではないでせうか。卽ち不平や退窟ばかりを掘り出さずに、感謝と喜びとを掘り出して行くのが本當ではないでせうか。私達世界中の人間が本當に自我觀念を破つて凡て一體の氣持となり、經濟も業務も天地から預けられた物として、其預り物をよりよく圓滑によりよく發展させ、よりよく正しく整へて行く其無我的な努力精進にこそ人間としての使命があることを感じて行くならば、此世界は其まゝ天國となり淨土となると思ふのです。だから一日も早く凡ての人の禍の根元である自我觀念から解脫せんことを望んで止ません。けれども其の自我觀念は仲々執念深くて容易に理論や道義だけでは逃げて行きませんから、如何しても信仰に入つてそれから拔け出る工夫をするより外に手段方法はない

と思つて居ます。

若し私達が人生の無意義を感じ、心の中に滿されない淋しさを感ずる時は、屹度邪路に踏み迷つて居る時です。卽ち自分を本當に生かし切れず、自我觀念の手前勝手な氣持に本當の人間を見失つて居る時です。心がノビノビとした自由を忘れ、天地の大道にまかせ切る寬濶とそして謙遜な心とを忘れたものこそ、本當の人生を知らずに居る見じめな者です。

また自我を主張して行くのは如何にも積極的のやうには見えます。自我を破ることは一見消極的なやうにも見えます。然し、それは外見丈であつて本當はアベコベです。自我主張は行詰りの道へ突進することなのですから、其處に本當の積極性はありません。一時的な空元氣です。其處には鬪爭があり不自由があり破滅があるだけです。自我を破つた寬宏中正な生活には深いおちつきと喜びと平和とがあり、最後の勝利があり如來との合一があり明るい感謝があります。如來の中には宿るこゝろ、不滅の自覺によみがへるこゝろ、廣い大空をかける大自由を充分に味ふ事が出來るものと信じます。

貴君は信仰を何か靈異力とでも云ふやうな特別な存在として信ずることのやうに御考へになつては居られないでせうね。そしてその靈妙な力で自分の人生を豐かにしたいと云ふ氣持が心の隅の何處かにひそんで居るのではないでせうね。之等は世間の人の思ひ易い信仰觀念で、一般的に想像して居るものですから、かうした信仰に入らうとは思ひたくない。と云つて此儘人生の無價値さを悲しみつゝ生きて居たくもない。止むを得なければ死があるだけだけれども、死其のものは人生を解決するものでないと思つて居られるのでせう。そして若し萬一にも自分の心に納得の行く宗教があつたら、それに沒入してもかまはぬと云ふ御氣持

も働いて居られるのでせう。

若しさうなら私は眞人生を求めようとなさる御氣持をもう一度反省して見て頂きたいと思ひます。

貴君が私のやうな者を御訪ね下さつたのも、人生に於ける價値と云ふか意義と云ふか、今までとは違つた人生觀を開拓しようと思召したからでせう。

私達はよく自分の名を殘すことに努力したがる傾向を持つて居ります。之が爲にあたら自分のいのちと力とを費して、或はぢれて見たり、或はひねくれて見たりしますが本當に自分のいのちが生きない限り、よしんば多少名が喬れたにしてもそれは唯だ恥を殘して居るのに過ぎないのではないでせうか。恐ろしい事です。かなしい事です。また世の中の大多數の人は自分の財產を造る事に腐心して居ます。無論生活を豐かにして今日を困らないやうにすることは大切なことですが、社會に流通すべき金を一個所に集めたからと云つて「あの人は成功した」と美んだり美まれたりすることは、本當の人生の價値を知らないからで、結局一時的な榮花の爲めに大きな恥を殘して居るのかも知れません。其處には必ず無理があります。自分では氣が付いては居ないでせうけれども、元來流通性を持つ財物が一つ所に停頓するにはそれだけ無理があつた筈で、春秋の筆法で云ふなら一方に働いても働いても食へないと云ふ大勢の人を造つて居る譯です。だからそれを預り物として合理的に働かし社會の進運に貢獻するやうに努めるならば、それはまた正しい事で聖業として尊敬するに足ると云へますが、唯だ問題は本當に預りものとして無私無我の經財觀念に立つて居るか何うかに依て區別さるべきでありませう。

私はかうした名よりも財よりも本當のいのちを殘して行きたいと思つて居ます。自分の正しい魂を、此の地上の若い魂の肥料として殘して行きたいと思つて居ます。イヤ凡ての人がさう仕掛けて呉れたら何んなにいい事でせうと望んで居ります。

要約して云へば自我中心の人生觀を止めて無我奉公の大精神に更生して行く時、始めて人生の眞意義を發見し、獨りに染まぬ人格が造られて行く事と思つて居ります。

それには色々方法もありませう。道德に依て人格をみがくことも出來るでせう。哲學に依て本當の人生を見極めることも出來るでせう。宗教理論に依て解脫覺醒することも出來るでせう。だが私は信仰に依る事が一番手取り早い途であり、一番確實な途であると信じて居ます。そして誰

でも信仰には入れるものだと信じて居ます。

それには本當に自分を改造して正しい自分とならしめないと思ふ心が大切で、さうでない限り正しい信仰には入れないものと思つても居ます。

永遠ないのちの爲に永遠の價値を自分の生活の中に刻み込んで行く。それは正しい信仰の力なくしては弱い私には出來ないことです」

師はかう云つて暫く言葉を閉ぢたので私は更にまた尋ねて見た。

「宗教にも色々あつて、何れが本當のものなのかさつぱり判りません。どれも之も自分のが一番よいやうに云つて居ます。嫌やですね。それだけに宗教は皆なすべて迷信的分子があるのではないかと思はれます。自家宣傳の愚劣さは本當に嫌やな氣持にさせます。だから私は何の宗教にも物足りなさを感じて居るのです。かうした考へはいけないでせうか」

「サア、大變むつかしい問題をかつぎ出しましたね。私も大體同感です。然し貴君の御考への全部には承服し兼ねます。御氣に召すか何うかは知りませんが一應申上げて見ませう」

師は微笑し乍ら、新たに御茶を入れ替へて私にもすゝめ、御自分も香りの高いその苦味をすゝるのであつた。

外にはうらゝかな春の陽光が輝き、そよ吹く風に白い花びらがハラハラと散つてゐた。（つゞく）

## 大事件と地藏尊

本誌に談話を寄せられた石橋德作先生は去る日の大事件の日貴族院内にある地藏尊を玉座の御前に安置し奉つた。

これによつて氏は大事件の進展に伴ふ不變に對して確固たる腹を作ることが出來たと云はれた。

また氏は別項にも述べてあるやうに變死者の家族を見舞れることを行としてゐられるが、樣子を知らぬ家人が物乞のやうに扱ふことがあつても氏は決して怒りを表はしたことは無く、香典を置いて來ると共に「地藏經」などを置いて喜んで歸つて來られる。あとで本當の氏の心持を知つた家人はいたく非禮を恥ぢ、且つ氏の信仰にうたれて一錢地藏の建立に努力するやうになるのが非常に多いさうである。

# 編輯後記

昨年四月創刊號を出してから滿一年、その間本誌が著實な發展の道を辿つて來たことは內外等しく認めるところです。宗門の素人が宗教的な大衆雜誌の理想を實現するために拂つた努力は此處に實を結んで特殊には宗教雜誌、廣くは雜誌界に一生面を開いたものであると自負してはばからない。この一年間の素晴らしい成果は法然上人鑽仰會全員の協力と諸方面の絶大な支持によるもので感謝の外はないのである。

◇今月は大衆文壇の大家子母澤寬氏の讀切小說をのせた。氏が御病氣中を押して本誌のために傑作を寄せて下すつたことは一大收獲であり、本誌が一流雜誌たる好個の示標である。今後は小說欄に於ても斷然他誌の追隨を許さぬ傑作のみを採用して行くつもりだ。

◇石橋德作氏、中村吉右衞門氏の感想も本號の誇りとするところ、前者は一錢地藏尊の發願者、行者の胸を打つものがあり。後者の藝道と弓道の一致を說く眞劍な態度は專修念佛行者のそれと共通するものがある。共に好個の讀物である。

◇本號の特輯は『育つもの、育てるもの』可憐なる鳥にも、幼きものにも、我々自分が學ばねばならぬ多くのものがあり、育つものまた同時に育てるものであり、育てるものはまた同時に育つものであることを敎へる。筆者共に斯道の大家である。

◇喝采裡に終決した佛典講義は本號より再び中村辨康師を患はして「法然上人法語」の解說を載せました。內容も形式も新たにし數回連載する筈御愛讀下さい。（道）

◇校正室に來る途中昨日の雨ですつかり櫻は滿開になつた。人道の櫻の街路樹は兩側にズツと咲きほこつてゐる。

◇櫻を見てふと思ひついたことはそれ程美しくないと云ふこと。櫻は少し騷がれすぎた。櫻は自身の持つてゐるほこりより少しく餘計な花をきせられ過ぎた。櫻はそのためにきたなくなつてしまつたやうである。それ等のよごれがふるひ落されて、又元のやうに野にポカリ咲く櫻、山の中腹に咲き樂しむ櫻となつたら、今の櫻は生れかはるであらう。その時再び櫻の咲くのを見たい。櫻の淸楚なほこりをあがめたい。（二）


淨土　五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十一年四月三十日印刷納本
昭和十一年五月一日發行

（定價金十錢）

編輯兼發行人　眞野正順
印刷人　赤尾光雄
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三　大日本印刷株式會社
發行所　法然上人鑽仰會　東京市芝區芝公園明照會館內　振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部　定價　金十錢（送料一錢）
一ヶ年　金一圓（送料不要）

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です　入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

# これだけ知りたい人は本紙を讀め

## 日刊

## 特色の紙本

佛教・神道・基督教等各宗教の時事
佛教學・印度學・宗教學等各學界の動向
佛青運動・教化運動・社會事業等の狀勢
學者・思想家・布教家等の論說・隨筆・講演

## 誇りの紙本

報道の迅速
記事の公正
編輯の清新
代の低廉
紙

購讀料(送料共)
一ケ月 六十五錢
一ケ年 七 圓


東京市京橋區銀座西五丁目
教學新聞社
振替東京二一二九一八番
電話銀座(57)四四四一三番

京都支局
京都市下京區新町通り花屋町下ル
電話(下)四一七七番

# 法然上人語抄

## 信仰の珠玉！
## 活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！
## 現代日本人の聖典！

浩翰なる上人遺文中より、現代生

藤井實應編
菊半裁版 一四四頁
クロース裝函入
定價 送料共 卅四錢

## 新刊發賣!!

手頃なポケット型、裝訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手輕に取出して讀める。心靜かなる時、惱める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を經てなつたもの。新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！配列にも、編輯にも勤め人も商人も勞働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

◇發行所 法然上人鑽仰會◇

からだをつよくする

# 大木五臓圓

春に鍛へて
夏に
備へよ！

大木五臓圓は病弱體を根本から立直すべく三百年一日の如く闘病に軀し、東洋本然の漢法醫學を以つて歴史を保持す。

大木五臓圓の成果は歴史と共に、益々好評を博し、近代醫學に伍し燦然として輝いてゐる。

藥價
五十錢
一圓
二圓
三圓
五圓

發賣元
東京神田・大阪淡路町
大木合名會社



昭和十年五月廿五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十一年四月廿日印刷納本　昭和十一年五月一日發行

淨土　第二卷　第五號

定價金十錢（送料一錢）